

永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌

辰
田
芳
雄

[illegible]

解通	解通
公勝	公勝
如好	如好
公育	公育
康毅	康毅
修長	修長
雅園	雅園
如好	如好
康毅	康毅
解通	解通

[illegible]

永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌

辰田芳雄

目次

はじめに

- 一 永正六年（一五〇九）九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌の概要
- （1）詠者
- （2）歌題
- （3）原本
- （4）写本
- （5）江戸時代の板本
- （6）『続々群書類従』一四「後柏原院御日次結題」と正徳三年の板本の関係
- （7）古記録の記述から見いだせる着到和歌の作成経緯など

おわりに

- 二 永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌の翻刻（未完）

永正六年九月九日起日後柏原天皇主催 着到和歌

辰 田 芳 雄

はじめに

着到和歌は、主に上巳の節供（三月三日）或いは重陽の節供（九月九日）を起日とし、その百日後に満日を迎える定数歌で、十人前後の参加者が春・夏・秋・冬・恋・雑の部で構成される百首の兼題を詠歌し、自筆記録する文芸である。起日と満日は身分・位階・官職の高い順で記されるが、他の九十八日分は身分や藹次に関係なく、無作為に決められた順に記されるところに特徴がある。着到和歌は、特に後土御門・後柏原天皇の時代に盛んに行われた和歌の形式で、後奈良・正親町天皇以後は衰退したが、江戸時代になり靈元院の時に再興される。室町・戦国期の禁裏では後柏原天皇（勝仁親王）主催の着到和歌が最も多く、二一^①度知られている。

勝仁親王・後柏原天皇主催着到和歌のうちで翻刻されたものを年次順にすると、

（1）文明十五年（一四八三）九月九日立春〜十二月十九日述懐、人数一五人（本山八重子「文明十五年九月九日起日勝仁親王主催着到和歌について―後柏原天皇宸筆着到和歌並びに「海路十日」懐紙との関係―」『立教大学大学院日本文学論叢』一九、二〇一九年^②）

（2）文明十七年（一四八五）九月九日立春〜十二月十九日祝言、人数九人（拙稿「文明十七年九月九日起日勝仁親王主催着到和歌の研究」『岡山朝日研究紀要』三六、二〇一五年）

（3）明応二年（一四九三）三月三日早春〜六月十四日閑屋、人数五人（拙稿「明応二年三月三日起日勝仁親王主催着到和歌の翻刻」『岡山朝日研究紀要』三七、二〇一六年）

（4）文亀三年（一五〇三）三月三日立春〜六月十四日祝言、人数一〇人（拙稿「後柏原天皇主催着到和歌の特徴（続）」―文亀三年と永正八年の着到和歌を事例に―」『岡山朝日研究紀要』四一、二〇二〇年）

（5）永正二年（一五〇五）三月三日都鄙立春〜六月十四日社頭祝世、人数一人（拙稿「永正二年三月三日起日勝仁親王主催着到和歌の翻刻」『岡山朝日研究紀要』三九、二〇一八年）

（6）永正三年（一五〇六）十一月九日立春〜十二月十九日祝言、人数五人（拙稿「後柏原天皇主催着到和歌の特徴―永正三年と永正十六年の着到和歌を事例に―」『岡山朝日研究紀要』四〇、二〇一九年）

（7）永正六年（一五〇九）九月九日歳中立春〜十二月二十日竹契週年、人数一人（後柏原院御日次結題）『続々群書類従』一四）

（8）永正八年（一五一二）三月三日山早春〜六月十四日寄神祇祝、人数八人（拙稿「後柏原天皇主催着到和歌の特徴（続）」―文亀三年と永正八年の着到和歌を事例に―」『岡山朝日研究紀要』四一、二〇二〇年）

(9) 永正十六年(一五一九) 三月三日歳中立春ゝ六月十四日社頭祝言、人数一〇人(拙稿「後柏原天皇主催着到和歌の特徴―永正三年と永正十六年の着到和歌を事例に―」『岡山朝日研究紀要』四〇、二〇一九年)

の九度分である。⁽³⁾

本稿では(7)を対象に底本を別にして再度翻刻を行う。この永正六年九月九日起日着到和歌は、すでに『続々群書類従』一四に「後柏原院御日次結題」として翻刻されているが、他の写本と比較すると異なっている部分が相当ある。また、明治期に活字化された時点(一九〇七年五月刊行)での誤りも発見されたので、「後柏原院御日次結題」の底本と思われる内閣文庫「著到和歌」を翻刻することで、諸本の異同を検証してみたい。

室町・戦国期禁裏着到和歌の江戸時代写本集である国立公文書館内閣文庫「著到和歌」(二〇一―一四六)は、三種類の着到和歌で構成されている。これはWEB上で公開されている。全一九四コマの内訳は以下の通りである。

- ① 永正六年九月九日歳中立春ゝ十二月二十日竹契退年、一六人、3コマゝ64コマ
 - ② 明応二年三月三日早春ゝ五月十四日関屋、五人、64コマゝ89コマ
 - ③ 永正二年三月三日都鄙立春ゝ六月十四日社頭祝世、一人、89コマゝ117コマ
- ②・③は右記の如く、すでに翻刻されているので、国立公文書館内閣文庫「御著到和歌」一冊はすべて翻刻されることになる。

一 永正六年(一五〇九) 九月九日起日 後柏原天皇主催着到和歌の概要

(1) 詠者

詠者は、後柏原天皇・三条西実隆・下冷泉政為・小倉季種・甘露寺元長・田向重治・東坊城和長・冷泉永宣・広橋守光・姉小路清継・三条西公條・下冷泉為孝・四辻公音・中山康親・甘露寺伊長・飛鳥井雅綱の一六人である。

後柏原天皇は、寛正五年(一四六四)十月二十日誕生、当時四十六歳。在位は明応九年(一五〇〇)十月二十五日から大永六年(一二六)四月七日(没)、六十三歳。歌集『柏玉集』がある。三条西実隆の『雪玉集』、冷泉政為の『碧玉集』とともに、三玉集と呼ばれた。

三条西実隆は、康正元年(一四五五)誕生。天文七年(一五三七)没、八十三歳。当時五十五歳、正二位、前内大臣。後土御門天皇・後柏原天皇・後奈良天皇に仕える近臣。永正三年(一五〇六)に内大臣。約六十年にわたる精密な『実隆公記』は戦国時代の政治・社会・文化を知る上で重要。日記『実隆公記』、歌集『雪玉集』がある。

下冷泉政為は、文安三年(一四四六)誕生。大永三年(一二三)没、七十八歳。当時六十五歳、正二位、権大納言。歌集『碧玉集』がある。

小倉季種は、康正二年(一四五六)誕生。享祿二年(一五二九)

没、七十四歳。当時五十四歳、従二位、権大納言。

甘露寺元長は、康正二年（二四五〇）誕生。大永七年（二五二七）没、六十二歳。当時五十四歳、従二位、権中納言、賀茂伝奏。父甘露寺親長は『親長卿記』の筆者として著名、自身も『元長卿記』を書く。

田向重治は、享禄元年（二四五二）誕生。天文四年（二五三五）没。八十四歳。当時五十八歳。従二位、前権中納言、兵部卿。

東坊城和長は、寛正元年（二四六〇）誕生。享禄二年（二五二九）没。七十歳。文明十九年（二四八七）に文章博士、明応五年（二四九六）に大内記、明応八年（二四九九）に大学頭。学者としての名声が高く、明応十年の辛酉革命には新年号「文亀」を勧進した。当時五十歳。正三位、権中納言、大蔵卿。

冷泉永宣は、寛正五年（二四六四）誕生。享禄三年（二五三〇）没、六十七歳。当時四十六歳。従三位、参議。

広橋守光は、文明三年（一四七一）誕生。父は権大納言町広光。広橋兼頭の子。大永六年（二五二六）没。五十六歳。当時三十九歳。正三位、参議。権中納言（十月十日任）、左大弁、武家伝奏、造東大寺長官。

姉小路済継は、文明二年（一四七〇）誕生。永正十五年（二五一八）没、四十九歳。当時四十歳。従三位、参議。

三条西公條は、文明十九年（二四八七）誕生。永禄六年（二五六三）没、八十七歳。当時二十三歳。従三位、参議、右近中将。父は実隆、母は勧修寺教秀の三女。父実隆から古今伝授を受ける。歌集

「称名院集」。

下冷泉為孝は、文明七年（二四七五）誕生。天文十二年（二五四二）没、七十八歳。当時三十五歳。従三位、非参議。父は政為。

四辻公音は、文明十三年（二四八一）誕生。橋本季経の子、実仲の養子嗣。権大納言正二位に至る。後柏原院流の書を能くした。天文九年（二五四〇）没、六十一歳。当時二十九歳。正四位下、参議、左中将。

中山康親は、文明十七年（二四八五）誕生。天文七年（二五三八）八月十四日没、五十四歳。当時二十五歳。正四位上、左近衛中将・藏人頭。

甘露寺伊長は、文明十六年（二四八四）誕生。元長の長男。天文十七年（二五四八）没、六十五歳。当時二十六歳。正五位上、左少弁。

飛鳥井雅綱は、長享三年（二四八九）誕生。元亀二年（二五七二）没、七十五歳。当時三十一歳。正五位下、左近中将。父は雅俊。

三条西実隆・公條、下冷泉政為・為孝、甘露寺元長・伊長の三組の父子が詠者になっていることが珍しい。詠者一六人は中世の禁中着和歌では最大の人数である。

(2) 歌題

春二〇首・夏一五首・秋二〇首・冬一五首・恋一五首・雜一五首の構成で、歌題は、九月九日歳中立春から十二月二十日竹契廻年まですべて漢字四文字で、鎌倉時代中期の歌人葉室光俊の出題を利用した。このような百日四文字歌題は、すでに永正二年三月三日起日の着到和歌に見られ（歌題は上冷泉為広）、これに倣ったと思われる。永正六年九月九日起日の着到和歌の歌題は、『実隆公記』永正六年九月九日条によれば、「百首題所望之間、出明題抄令写取之」とあり、天皇の所望により三条西実隆が『明題抄』から選んだ。この『明題抄』は現在宮内庁書陵部に伝わる『明題部類抄』で、第五の百首題下にある「入道光俊朝臣出之」が該当する。⁽⁴⁾「年記可尋之」とあるが、葉室光俊が出家したのは嘉禄二年（一二三六）であるからそれ以後である。

室町・戦国期には、禁中で漢和聯句会や和漢聯句会が頻繁に催されていた。韻字連歌⁽⁵⁾や疊字連歌⁽⁶⁾の催しもあった。これらは、漢語と和語とが混淆した文芸である。百日四文字歌題は、こうした文芸の影響下に再興されたものではないか。⁽⁷⁾

(3) 原本

一日分のみ知られている。九月二十六日分（春の一八番目）落花入簾（『大東急記念文庫善本叢刊中古篇7和歌IV』汲古書院、二〇〇五年）である。歌題に日付がないことが珍しい。

落花入簾

1 ひま^{飛万}とめて^{免天}散くる^{留与}花よ玉^多すたれ

まきの戸^{滴起}ほその雪^{保能}とみる^{留天}まで

雅綱

2 よきて^{与起}ふけさ^{布遣佐}そハぬさへに玉^{尔多}すたれ

ひま^{飛万}もとめる^{流志}花のした風^多

伊長

3 さそひ^古こはよし玉^多たれの内外^奈なく

花に^{耳留}ゆるさむ^{無能}春の山^{可勢}かせ

実隆

4 さそひ^佐くる^{累伊}いつくの風^乃そ玉^{春多}すたれ

かけて^{閑志}もしらぬ^怒花の色^整香ハ

為孝

5 ちり^可かふや音^{奈起}なき風^毛も玉^{多連}たれの

ひま^留もとめる^志花のしら雪

重治

6 花^万ちりて今朝^{越徒}なをつらし玉^{春多}すたれ

ま^乃くらの夢^毛ものこる^累春風

永宣

7 色裳も香も内外可希をかけてちりくるや
は者那農なのたもと乃古須農のこすの追風

季種

8 をしあて農尔保飛者可利古春能尔のにほひハかりもこすの内に
花者とはいハむ花そちり来る

9 風者奈越福堂万はなをふきそたゆまぬ玉簾

ひ飛累乃まもる花のひまハあれとも

済繼

10 ちりきて幾天盤尔は袖にそつもる玉留春連すたれ
吹まく風者那乃志のはなのしら雪

守光

11 は可奈越登者春多禮かなさを何そととへは玉利毛路者那利累すたれ
露利毛路者那利累よりもろくはなそちりくる

公音

12 よし佐者毛古須能満尔やさは風もうらみしこすのまに
木能登志のもしらぬ花そちりくる 元長

13 花屋幾やさき風やさきにとこすのまの
人農尔本尔飛可連のにはひにひかれゆく色

和長

14 一咽多かたにいか、うらミむたますたれ
ひ毛流能里まもる花の風のたよりを

康親

15 玉多乃飛万たれのひまもとめてもさそひくる
は者那尔多類可勢毛連なにまたる、かせもこそあれ

政為

16 おしめ於利遠とも花吹流春多連いる、玉すたれ
み見利遠とりを木、にかへす春風

公條

(4) 写本

詠者一六人の和歌が掲載されている江戸時代の写本には、国立公
文書館所蔵内閣文庫「著到和歌」、宮内庁書陵部「後柏原院御着到
百首」(伏五四)、国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本「禁裏御
著到和歌」、宮城県図書館伊達文庫「近代著到和歌」がある。確認
ができていないが、国文学研究資料館の所蔵和古書・マイクロ／デ
ジタル目録データベースにより「着到」で検索してみると、上記以
外に篠山市教育委員会青山歴史村「永正六年禁裏着到和哥」、彰考
館「禁裏御著到和歌」、今治市河野美術館「永正六年禁裏御着到和

歌」がヒットする。彰考館「禁裏御著到和歌」は、島根大学付属図書館桑原文庫「禁裏御著到和歌」上一同様に三条西実隆と下冷泉政為の詠のみを収める。

後柏原天皇・三条西実隆・下冷泉政為・姉小路濟繼の四人の和歌で構成された写本に、「禁裏御著到百首和歌」（阿波国文庫の蔵書印有り）がある。これは、『大日本史料』の永正六年九月九日条に引用されている公卿三条西公輝氏所蔵「禁裏御著到百首和歌」である。

また、後柏原天皇の百首は『列聖全集・御製集六』に、三条西実隆と三条西公條のそれは「雪玉集」（『国歌大観』『私家集大成・中世V』）、下冷泉政為のそれは「権大納言政為卿着到和歌」（井上宗雄氏所蔵、古典文庫第四二八冊『中世百首歌一』）にそれぞれ翻刻されている。

（5）江戸時代の板本

『統々群書類従』一四に「後柏原院御日次結題」として翻刻されたものは、正徳三年（一七二三）九月吉日に江戸の須原茂兵衛と京都の河南四良右衛門が出版した冊子本を底本としている。春・夏・秋・冬・恋・雑の五冊本であった。国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースで「後柏原院御日次結題」で検索すると、九点ヒットし、新潟大学佐野文庫のものの画像を見ることができ、

『統々群書類従』本には見られないが、最後の頁に刊記があり、「正とく三のとしミつとのミ九月吉日／武都・皇都／書林／須原茂兵衛・河南四良右衛門／開板」とある。

ところで、この出版は再版であった。八年前の宝永二年（二七〇五）にすでに出版されていた。「後柏原院御著到百首」で従前のデータベースを検索すると、八点ヒットし、酒田市立図書館光丘文庫所蔵、和歌山大学紀州藩文庫所蔵のものの画像が見られる。外題は「後柏原院 御著到百首 春」。タイトルは正徳三年のものが「後柏原院御日次結題」であるのに対し、「後柏原院御著到百首和歌」である。また、「自永正六年至于正徳三年二百五年」の部分は「自永正六年至于宝永二年百九十七年」である。しかし、本文や挿絵はまったく同様で、宝永二年の板本が正徳三年にも使用されている。出版の経緯がわかる宝永二年の跋文と刊記は以下の通りである（これらは正徳三年版にはない）。

〔跋文〕

後柏原院御著到百首和歌者、往年以或本書写之、其誤不為尠、今又得一本、補其所闕裨、其不足校正之、書林某乞梓行、至于再三不得已許之、故手書而附之、皆寶永二乙酉季春日、滌毫於 江府旅舎／備陽岡山／野村尚房

〔刊記〕

寶永二乙酉年六月日／江戸書林／萬屋清四郎／栗原長右衛門／梓行 これにより、「後柏原院御著到百首和歌」の編者は岡山の野村尚房であることが判明する。跋文には、最初に底本にしたものには誤りが少なからずあり、別の本により欠落を補ったり校正をしたりしたが、出版してくれる版元がなく、しかたなく手書きをしたとあり、時に宝永二年の春に江戸の旅舎で書いたとある。しかし、刊記

を見ると、その後に出版を引き受けてくれる本屋が見つかり、その年の晩夏六月に江戸の本屋で上梓されたことがわかる。

本文中に「両本如此」「両本不足」「両本闕」などある「両本」は、最初に底本にしたものとその後校正に利用した本を示している。従って、この出版物は「両本」を利用して成立しているのもとの写本が忠実に表現されていないことに注意しなければならない。「両本」がどの写本に相当するのかは、不明である。

なお、編者の野村尚房は、備中鴨方藩（岡山藩の支藩、江戸期の呼称は岡山新田藩）の藩士で、宝永・正徳年間に江戸浅草鳥越町にあつた藩邸⁽⁸⁾に何度も赴任している。野村は三玉集（後柏原天皇『柏玉集』、三条西実隆『雪玉集』、下冷泉政為『碧玉集』の総称）の注釈書である『三玉挑事抄』⁽⁹⁾を正徳五年（二七一五）に成稿し、享保八年（二七二三）に刊行している。「後柏原院御著到百首和歌」編集の延長上に『三玉挑事抄』の成立があつた⁽¹⁰⁾。野村のこうした活動の背景には、霊元天皇による禁裏着到和歌の再興、好学大名池田光政の文芸活動があつたと思われる。

（6）『続々群書類従』一四「後柏原院御日次結題」と正徳三年の板本の関係

『続々群書類従』一四の「後柏原院御日次結題」（A）は宝永二年・正徳三年の版本（B）を底本にしているが、まったく同じではない。例えば、九月九日歳中立春の最初の二首、御製と三条西実隆の句を見ると、御製は（B）では

年の内の雪もけなくに梓弓おして春立けふの初風（二二文字）であるが、（A）では

年の内の雪もけなくにあつさ弓おして春立つけふの初風（二五文字）

と変わっている。実隆の句は（B）では

春霞たてるやおなし年の緒をこなたかなたにかけて見すらん（二七文字）

であるが、（B）では

春霞たてるや同じ年の緒をこなたかなたにかけて見すらん（二六文字）と変わっている。

（A）を通覧すると、御製は二五文字、他の詠者は二六文字に調整されている。この調整のために、漢字をひらかなに、或いはひらかなを漢字に改める作業が行われている。その結果、この時点で誤りが生じる場合があつた。つまり、版本の読み誤りである。例えば、九月二十八日桃花曝錦（春の19）の一六番目三条西実隆の句は、

（B）花を見てかへるといはぬ人ハなし袂も千、のにしきたちきてであるが、千、（ちぢ）の「千」の字を「も」と読み誤り、

（A）花を見てかへるといはぬ人はなし袂も桃のにしきたちきてとしている。（A）の翻刻者は歌題が桃花曝錦であるから「千、」は「も、」でなくてはならないと考え、二六文字に調整する条件も考慮して「桃」としたのであろう。ただし、実隆は、「三千年（みちとせ）の桃」の故事から「千々」の表現で桃を連想させる工夫を

していると思われる。

活字本『続々群書類従』一四の「後柏原院御日次結題」の欠落部分は、以下の通りである。

①九月十日野外朝霞（春2）の十六、伊長の下の句と元長の上の句が欠落

②九月十三日水郷若菜（春5）の九、為孝

③九月十六日南北梅花（春8）の十四の季種の下の句・十五の為孝・十六の守光

④十月十九日萩花蔵水（夏5）の九、守光

⑤十二月五日絶経年恋（恋15）すべて

⑥十二月十九日憂喜依人（雑14）十三・十六

⑦十二月二十日竹契退年（雑15）六・十六

但し、⑤は版本にあり、『続々群書類従』本の編集上での脱落と思われる。

③について。これは他の写本も同様であるので、親本は同一である可能性がある。しかし、「後柏原院御日次結題」は「谷ふかみ木こりの道の^{兩本如此}」であるが、底本とした内閣文庫本と高松宮本は「谷ふかみ木こりの道のあさちふも」、伏見本は「谷ふかみ木こりの道のあさゆふも」となっていて、親本の写し取りに差がある。さらに①九月十日野外朝霞一五首目の下句・一六首目の欠落、②九月十三日水郷若菜九首目の欠落などを考慮に入れると「後柏原院御日次結題」にも正確さに欠けるところがあり、他の写本と校合することは重要であると考ええる。

(7) 古記録の記述から見いだせる着到和歌の作成経緯など

『実隆公記』永正六年九月三日条から十二月二十六二日条まで記事や紙背文書のうちで着到和歌に関係する記事を列挙し、着到和歌の日程を付記する。

九月三日条 及^レ晩有^二女房奉書^一、重陽詩歌題事、并著到和歌可^レ

令^二詠進^一哉否事、被^レ仰^二下之^一、彼状統^レ左、（この女房奉書は紙背文書にある）

紙背文書の女房奉書A（前略）さて八九日の^{（詩歌）}しいか御たい、この

うちいつれにてしかるへく候はんするやらん、^{（詩）}しの御たい、おく

のハあまり一かとも候ハぬたいにて、^{（題）}はしのにて候はんするやら

ん、又九日より御ちやく^{（着到）}たうあそハしたく候、それ二あそハし候

は、御ち^{（カ）}からにて、いかやうにもおほしめした、れ候へく候、

（下略）（菊酔年花〈題中取韻〉などの詩題五つが書かれている）

九月四日頃と思われる紙背文書の女房奉書B 昨日は御事くハしく

申され候、御ちやく^{（着到）}とうあそハし候はんする、こと二御うれしき

御事にて、これにて御ち、やうの御事にて候、御人^{（人数）}すまつこのふ

んとおほしめし候、このうちない^{（内々）}く二ハこと二りやうしやう申

候ましきとも候へとも、まつおほせられ候へく候、とさま二ハこ

れまておほせられ候ハす候やらん、^{（上冷泉為広）}みんな部卿入たうハ一かう

しゆつ^{（出頭）}とうも候ハぬ二いか、候へき、たれにもか、せられ候はん

するやらん、まいらせられ候はんするハ御ちやく^{（着到）}たうをそといた

され候にてもとかくもおほしめ候、（下略）

九月五日条 及^(甘露寺)晚元長卿來臨、御著到相公羽林可^(三条西公條)詠進之間事也、加^レ奉了、重陽詩題同到來、

九月八日条 著到和歌籤、可^レ書進上銘之由、被^レ仰下、則榮進上了、

九月九日条 嘉節幸甚々々、(中略) (自^二今日^一日課) 百首題所望之間、出^二明題抄^一令^レ写取之、(松木侍從) 松殿三位來、甘^(甘露寺元夜)黄、姉三品、冷泉三品等著到歌等、被^レ談之、(中略) 及^(知仁親王)晚參内、先於^二宮御方^一、有^二小院事^一、小時依^レ召參御三間、著到和歌書^レ之、其後有^二御盃事^一、二献、女中陪膳也、(中略) 今日兩席懷紙進上之、相公同進上之、

九月十五日条 終日念誦、禁裏御著到書進上之、相^(三条西公條)公当番參入 春7

九月十七日条 御著到御製拜見、返上之、 春9

九月廿三日条 木阿來、著到歌可^レ詠之由称^レ之、春部廿首既終功、令^レ見之、 春15

九月廿八日条 早朝御著到歌書進之、伊長來、冷泉三位入來、

春20

十月廿三日条 著到和歌書進之、御製御詠草拜見之、 秋

9

十月廿九日条 御著到今日書進之、 秋15

十一月一日条 又著到御製可^レ拜 秋17

十一月五日条 禁裏著到和 冬1

十一月九日頃と思われる紙背文書的女房奉書C (前略) 御

ちやくたうおほえの御つもりにて、まつ五しゆのふんあそハして候、よきやう二申され候ハ、御うれしき御事にていらせをハしまし候へく候、あすハかならずおほしめし候よしよく申とて候、このよし御心え候へく候、かしこ、

十一月十九日条 禁裏御著到書進上之、 冬15

十一月二十日以後と思われる紙背文書的女房奉書D (前略) さてハ御うたこいニなり候て、いよく御しやうたあなき御事ともにて候、けふハ御ひまも候ハすハ、しつかに見まいらせられ候へく候、又この御くわみし御らんし候て、やかてまいらせられ候へく候、それにもさいしやうの中將殿も御かうミやうにてこそ候へ、あさつてハかならずと申とて候、このよし御心え候へく候、かしこ、

十一月廿五日条 講了、書^二和歌著到^一、 恋6

十二月四日条 冷泉三位來、著到和歌被^レ談之、 恋15

十二月十二日条 著到和歌、今朝書進之、 雜7

十二月十八日条 著到和歌、今日書進之、 雜13

十二月十九日条 抑、御製御詠草拜見、有^二女房奉書^一、委細愚報申入之、 雜14

女房奉書E けふ八日時さためのちんのき、めてたくおほしめし候、さてハ御ちやくたう、するくとあすまでにてめてたさ、つゐに^(首)しゆにても、しかくと御しあんをよひ候ハて、ことに御正たみなき御事ともにて候つるに、たひくねんころに申され候を、御ちからにて、なにとやらん無^(無為)ににあそハしとけられ候ぬ

と、いまにはしめぬ御うれしさハ、おほせられつくされかたき御心のうちに候、あすハ夕かたほとに、かならず御まいり候て、あそハし御ハんすると、御身つからをこしおほしめし候、よく御心えて申とて候、このよし御心え候へく候、かしく、

十二月廿日条 今日著到和歌、被_レ終_二其功_一、仍晩頭参内（夏直衣雖_レ不_レ可_レ然、時服潤色不具間、内々之儀所_二有用也、不_レ可_レ為_レ例）、相公羽林同道、則書_二御著到_一（二首昨今分）了、小時参_二御前_一（御三間）、数刻御言談之後、三献有_二盃酌_一、相公羽林

候_二御陪膳_一、予前、雅業・言綱朝臣等役_レ之、甘露寺中納言・兵部卿・大蔵卿・新中納言・冷泉宰相・四辻宰相中将・伊長等候_レ之、此外冷泉大納言・小倉大納言・姉小路宰相・冷泉三位・康親朝臣・雅綱、下姿参仕、於_二殿上_一有_二盃酌_一云々、百日無為無事珍重々々、三献天酌也、三献共以予賜_二天酌_一了、時宜快然珍重々々、木阿来、百首清書来、

十二月廿二日条 姉小路一荷両種送_レ之、御著到無為執著之由、謝送_二之_一、

十二月廿六日条 顕基卿百首合点遣_レ之、尚氏百首加_二一見返_レ之、

天皇は実隆に着到和歌に参加して詠進するかどうかを尋ねて（女房奉書A）、実隆の返答により着到和歌の興行を治定している（女房奉書B）。その際、重陽の節供を祝う漢詩の題をいくつか実隆に示してその可否を尋ねている（九月三日条・女房奉書A）。重陽の漢詩の題の選定を呼び水に実隆に対して着到和歌への参加・助力を

要請したと思われる。天皇は実隆の参加の意向を喜び着到和歌の興行になみなならぬ意欲を示し、詠者の選定に関して永正二年九月九日起日着到和歌の歌題出題者上冷泉為広の禁裏への出頭がないことを心配して実隆に相談している（女房奉書B）。天皇は、実隆の助力を確実にするために息子の公條の参加も打診している（九月五日条）。以上のことから、天皇は三条西実隆の和歌の力量に強い期待をしていることがわかる。

実隆は、起日の前日に着到和歌の籤（せん）にその銘を書き（九月八日条）、歌題も「明題抄」の中から「入道光俊朝臣」（葉室光俊）出題の百日四文字歌題を選び提出している（九月九日条）。禁裏に着到和歌興行に際して、実隆は重要な役割を果たした。なお、着到和歌の百首題は兼題であるが、この場合起日に示されたので、甘露寺元長・姉小路済継・下冷泉為孝らは慌てて相談をしている（九月九日条）。

天皇はたびたび実隆に着到歌を見せて、評価を乞うている（九月十七日条・十月二十三日条・十一月一日条・女房奉書C・女房奉書D・十二月十九日条）。満日前日には、天皇は実隆をおおいに頼りにしていたことを感謝の意を込めて述べている（女房奉書E）。そして、満日の宴では、実隆は特別に三献とも天酌を賜った（十二月二十日条）。

ところで、実隆は春の一日目ですでに春二〇首を読み切っていた。その日に將軍足利義尹の同朋衆木阿弥がやって来て「着到和歌を詠みたい」と言ったので、実隆の春二〇首を見せている（九月二

十三日条)。木阿弥は満日にもやって来て、「清書」して帰っている(十二月二十日条)。これは木阿弥自身の趣向から出たものというより、將軍義尹が興味関心を持ち、木阿弥を使者として実隆に遣わしたと考えるのが自然であろう。有職故実に詳しい將軍の奉公衆大館尚氏も「一見」を加えている(十二月二十六日条)。とすると、この禁裏着到和歌興行は、將軍に返り咲いた足利義尹に対する文事の披露という側面があったのではないか。永正の錯乱の翌年、永正五年七月一日に足利義尹に將軍宣下があった。この年、天皇主催九月九日起日着到和歌は興行されたが、実隆の参加はなかった⁽¹⁾。そのため、この度禁裏着到和歌に期する天皇の思いは強かったと思われる。

おわりに

永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌は、以下のような特徴を持つ。①歌題は、珍しい百日四文字歌題で『明題抄』の中から三条西実隆が葉室光俊の出題を選んだ。後柏原天皇は三条西実隆の和歌の力量に多く頼っていた。②詠者は中世禁裏着到和歌のうちで最大の一人である。そのうち、三条西実隆・公條、下冷泉政為・為孝、甘露寺元長・伊長の三組の父子が詠者になっていることが珍しい。③永正五年に將軍に返り咲いた足利義尹はこの禁裏着到和歌に関心を持っていたと思われる。④最初に翻刻・出版された着到和歌である。宝永二年に(一七〇五)に岡山藩士野村尚房の編集により江戸で「後柏原院御着到百首和歌」として出版され、正徳

三年(一七二三)に江戸と京都で「後柏原院御日次結題」として再版された。さらに、『続々群書類従』一四(一九〇七)に「後柏原院御日次結題」として活字化された。

注

(1) 拙稿「後柏原天皇主催着到和歌の特徴―永正三年と永正十六年の着到和歌を事例に―」(『岡山朝日研究紀要』四〇、二〇一九年)。

(2) 前注の拙稿掲載の表1後柏原天皇主催などの着到和歌一覧のうち●勝仁親王・後柏原天皇主催着到和歌No.5に該当する。人数15人、起日歌題立春、二日目子日、満日歌題祝言、歌題構成20・15・20・15・10・20堀河院初度百首、出典お湯、原本△、詠者勝仁親王・女房(後土御門天皇)・邦高親王・道永法親王・花山院兼子・庭田朝子・四辻春子・四辻季経・上冷泉為広・甘露寺元長・山科言国・田向重治・万里小路賢房・庭田重経・冷泉永宣、と追加する必要がある。なお、この表1では、歌題についてさらに追加するべき情報がある。No.6は為家百首題C、No.12は文正百首、No.13は為家百首題B、No.15は為家百首題A、No.19は弘長百首である。為家百首題は宮内庁書陵部蔵五〇九―七『明題部類抄』(国文学研究資料館写真全26コマ)の「入道前大納言為家卿」の百首題の三つ。Aは114コマ目から。Bは116コマ目から。Cは118コマ目から。

(3) 後土御門天皇主催着到和歌の翻刻は以下の通りである。

(1) 文明十二年九月一日立春永く十二月十一日祝言、人数一五人(拙稿「文明十二年九月一日起日後土御門天皇主催着到和歌の翻刻」『岡山朝日研究紀要』三八、二〇一七年)

(2) 文明十三年九月一日立春朝など十二月十二日寄水祝など、人数一〇人(三村晃功「内閣文庫蔵『文明十三年着到千首』—解題・本文・初句索引—」『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』四二、二〇〇四年)(別府節子「着到和歌」について—「文明十三年着到千首短冊」を中心に—」『出光美術館研究紀要』二二、二〇一七年)

(4) 宮内庁書陵部蔵五〇九—七『明題部類抄』(全226コマ)のうち、168コマ目。

(5) 韻字連歌は、偶数番目の句に脇句の入韻で押韻した韻字を踏韻する連歌(『実隆公記』文明十七年五月七日条)。

(6) 一般に疊字とは、「時々」「度々」など同じ字が続く漢語を指すのであるが、単に連歌の長句や短句に二字以上の漢語を含むものをいう。例えば、『蜷川家文書之六』九六連歌懷紙写。

(7) 百日四文字歌題は、『明題部類抄』では「後京極摂政家」(九条良経)「入道前中納言定家」(藤原定家)「入道光俊朝臣」(葉室光俊)の三種類が見える。『類題鈔』では葉室光俊を除き次の二つが見える。「同家(九条良経) 百首文治三年十一月四日大式入道(鴨長明) 出題云々」として元日立春の閑法述懐。「百首題四字京極黄門(藤原定家)」として閑路早春の社頭祝言(『類題抄』研究会編『類題抄(明題抄) 影印と翻刻』笠間書院、一九九三年)。

(8) 文久元年の江戸麹町六丁目の板元尾張屋清七の「東都浅草絵図」では、鳥越明神の南に「池田内匠頭」の上屋敷とある。現在では台東区浅草橋二丁目の台東育英小学校のあたり(「切絵図・現代図で歩く江戸東京散歩」人文社、二〇〇二年)。

(9) 『三玉挑事抄』は「三玉集」の中から和漢の故事を典拠とする七五

〇首を選び、その出典を挙げたものである。岩坪健編著『三玉挑事抄』注釈(和泉書院、二〇一九年)はそのすべてを翻刻し、訳注を施している。なお、永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌の中から『三玉挑事抄』に選ばれている和歌は、御製八首・実隆一首である。御製は春一四行路春草(二六頁)・春一九桃花曝錦(五〇頁)・夏一四野亭螢火(八七頁)・恋六臨機変恋(三〇五頁)・恋一二非心離恋(二八八頁)・雑八樵路日暮(四三〇頁)・雑一〇滄海雲低(五〇二頁)・雑一四憂喜依人(四二二頁)、実隆は冬一初冬落葉(二六二頁)である(頁数は『三玉挑事抄』注釈)。

(10) 神作研一「一枝軒野村尚房の伝と文事」(『近世文芸』六三、一九九六年。のちに『近世和歌史の研究』角川学芸出版、二〇一三年に再録)。

(11) 正二位・権大納言・民部卿上冷泉為広は、將軍足利義澄の推挙で歌道師範となり、幕府の相伴衆も務めていた。そこで、足利義尹の入洛を恐れて永正五年四月に義澄が近江坂本に出奔すると、それに従って出家した(『実隆公記』永正五年四月十六日、十七日条。法名は宗清。同年六月八日には足利義尹が入洛し、七月一日に將軍宣下があった(『実隆公記』同日条)。

(12) 『実隆公記』永正五年九月九日条、十二月二十日条。三条西公條と下冷泉為孝が初めて禁裏着到和歌に参加した。

二 永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌の翻刻

永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌

— 国立公文書館内閣文庫「著到和歌」(二〇一—一四六) 当該部分の翻刻 —

国立公文書館内閣文庫「著到和歌」の一番目(画像3コマ目から64コマ目)が永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌である。春(二〇日)・夏(二五日)・秋(二〇日)・冬(二五日)・恋(二五日)・雑(二五日)、九月九日歳中立春から十二月二十日竹契廻年までの百日分である。これを底本として翻刻した。詠者は後柏原天皇・三条西実隆・下冷泉政為・小倉季種・甘露寺元長・田向重治・東坊城和長・冷泉永宣・広橋守光・姉小路濟継・三条西公條・下冷泉為孝・四辻公音・中山康親・甘露寺伊長・飛鳥井雅綱の一人である。

この着到和歌は『続々群書類従』に①「後白河院御日次結題」としてすでに一九〇七年に活字化されている。この活字化は岡山藩土野村尚房により翻刻され宝永二年(一七〇五)六月に江戸の本屋で出版され、正徳三年(一七一三)に江戸と京都で再版された②板本を底本としている。

一六人の和歌が確認できる公文書館所蔵「著到和歌」以外の写本は、③宮内庁書陵部「後柏原院御着到百首」(伏五四)④国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本「禁裏御著到和歌」、宮城県図書館伊達文庫「近代著到和歌」などが知られているが、①・②・③・④を参照した。翻刻における注(※)での略称は、①：日、②：版、③：伏、④：高とする。

詠者一六人のうちの一部の詠者のみ収めている写本がある。後柏原天皇・三条西実隆・下冷泉政為・姉小路濟継の四人の和歌で構成された写本に⑤東京大学史料編纂所「禁裏御著到百首和歌」(阿波国文庫)がある。また、後柏原天皇の百首は⑥『列聖全集・御製集六』に、三条西実隆と三条西公條のそれは⑦「雪玉集」(国歌大観)「私家集大成・中世V」、下冷泉政為のそれは⑧「権大納言政為卿着到和歌」(井上宗雄氏所蔵、古典文庫第四二八冊「中世百首歌」)にそれぞれ収められている。翻刻における注(※)での略称は、⑤：阿、⑥：列、⑦：雪、⑧：古とする。

(凡例)

- (1) 月日(或いは日付)・歌題の下に、起日九月九日からの日数を記し、さらに春・夏・秋・冬・恋・雑の各部での順を記した。例えば、十月「三日 寢覚郭公 夏の4 24」は、夏の部では4番目で、全体では24日目という意味である。
- (2) 各日(各歌題)に十六人・十六首あるはずである。和歌の頭に先頭から順に算用数字でその順番を記した。底本では、例えば十月十六日二星適逢(秋の2)の場合、本来十六首あるべきであるが、十三首しかなく、「欠3：雅綱・和長・為孝」とあるように、欠落している詠者を欠としてその名を記した。
- (3) 上の句と下の句の間を一文字分空けて一行に記し、最後に詠者を記した。詠者は底本の記載通りにした。また、平仮名の字母は、右側に小さくそれを記した。
- (4) 網掛けを施した部分は、※の後に注記した。※のあとに略称がないものは、この公文書館所蔵「著到和歌」についての注である。例えば、「※か(のイ)」の場合は、網掛けの字の「か」の右側に記されている注書きである。「※日：」は、『続々群書類従』「後白河院御日次結題」の異なった記載である。一つの歌に複数の注がある場合は、「※2」などとした。
- (5) 底本に欠落している和歌は、③宮内庁書陵部「後柏原院御着到百首」(伏五四)を底本にして補った。

九月九日 歳中立春 春の1 1

1	年 乃 のうちの雪 能 もけなくにあつさ弓 を して春たつけふ 能者 のはつ風	※日…お
2	春 可 かすみたるや同し年の を 、 古 奈 多 加 奈 尔 可 こなたかなたにかけミすらん	実隆 ※阿…お
3	世 乃 の中は年 古 こえぬへきことハりの 能 本 可 多 尔 多 ほかにたちくる春のいろかな	政為
4	行めくる月日 留 いそきてあたらたまの としの 能 をハりもはつ春 毛者 のそら	季種
5	かくてこそ千世 古 もかそへめふるとしの 暮 能 やらぬうちに春ハきにけり	元長
6	松の雪 婦 ふるとしなから朝日 奈可 かけ あた、かきなる春は来にけり	重治 ※日…く
7	年のうちは春 能 のミ色にさきたちて 花うくひすやあとにまたれん	和長
8	はなとりの色音 毛 もわかぬとしのう ハ けふたつ春も春や待つらん	永宣 ※日…に
9	朝日 可 かけまつのとけき 个 やふるとしの きえあへぬ雪に春をミすらん	守光 ※高…との ※2日…へ
10	いにしへもいかにい 者 はんとひと、せを たとるにおなしけふの春かな	済継 ※阿…か
11	あまつ空 可 かすみもやらてとしのうちハ いたりいたらぬ春をミるかな	公條
12	としのうちハまつもおしむもこ、ろそと けふ立春や身にまかすらん	為孝
13	たち帰 多 今くる春や 者 はやせかハ こそこのほりものこる日なミに	公音 ※高…つや
14	年 古 こえぬ春待えてハおりにあふ 雲めの庭をまたいそくなり	康親
15	しら雪 志 もまたはるとしの空 奈可 ながら たつ春しるき朝日影かな	伊長
16	いそくらんたかこ、ろよりうつりきて 年をもこえぬ春のひかりそ	雅綱

十日 野外朝霞 春の2 2

1	朝戸出の野守 可 か庵よハ春の霞も袖 耳 に袖 耳 に露 希可 けるらし	守光
2	朝な雪 能 のふる道たつねきて まつ春日野に立 可 かすミかな	康親
3	時しらぬ山たにあるにあさなく すその、かすミいく重立らん	済継
4	野へはまたかれふの草の朝霜 尔 に かすみの色もむすばられつ、	雅綱
5	またさゆる雪の光にかすミさへ むらきえわたる野邊の朝かせ	季種
6	春さむミ枯の、霜もうちかすミ いつる日影に今やきゆらむ	公音 ※日…く
7	朝 多 またき霜の 乃可 れふのむら に に かすむやへのみとりなるらん	政為 ※阿…かミ
8	野へハまた行人見えぬ朝ほらけ 霞の外の袖 奈可 やなからむ	公條
9	今朝そみる秋 類 ふく風の色よりも かすミにかはるむさしの、ハら	為孝
10	朝日 可 かけいつる高ねハまつ見えて かすむす糸の、色ぞはるけき	実隆 ※日…伏・雪・阿…や ※2阿…春
11	矢田のの、霞の袖 毛阿 もあハ雪に 又ふきかへすミねのあさかせ	永宣
12	野をとをみふかき霞のかきりをハ 日たけてはる、空にこそしれ	重治
13	朝たちて分るよとのや舟よハふ 声はきこえてなをかすむらん	和長 ※日…そ
14	春日野やゆかりの草のすりころも 今朝を 者 はへて立霞かな	元長 ※日…16の下句 ※日…伊長
15	わか草のあをのかハらの朝かすミ いつれあらそふ春のいろかな	伊長 ※日…16はなし
16	草木にハ春もわかれす朝かすミ かすみはてたる野邊の遠かた	

十一日 海上晚霞 春の3 3

- 1 浪のうへハ入逢のかねもほととをし 乃可 林毛本 越 かすむやタへかへるつり舟 可 通 徒
- 2 立きゆる色やハわかむタくれハ 幾 多 可 越 奥津しほあひにうかふ霞も 志本 飛 爾 可 婦 毛
- 3 タしほのひかたやとをく成ぬらん 志本能 飛 可 多 かすみはてたる浪のしつけさ 可 多 志
- 4 暮わたる霞の波にうきしまの 多 累 乃 耳 満 乃 松は色なき春の一しほ 盤 奈 起 本
- 5 塩かせは吹くともなきタなきに 可 世 盤 毛 奈 幾 爾 たつや霞の波もしつけし 乃 毛 志 个
- 6 あまのすむしるへもなきミの千里まで 阿 能 志 流 奈 能 満 かすむやけふり浦の夕暮 可 希
- 7 浦ちかく見えすハわかし奥津舟 可 可 あとは霞のふかきゆふなミ 阿 盤 可 起 奈
- 8 あまにふね一はまかハぬ波の色も 万 尔 年 者 満 可 乃 毛 かすむにくるはるのうらかせ 可 爾 類 者 乃 可
- 9 かすみもや袖をかさぬるあま衣 可 毛 阿 万 日もタくれのうらのつりふね 毛 徒 年
- 10 タしほのひかたの松のうす霞 志本 乃 可 多 能 寸 はるのうミへよいつハありとも 者 累 阿
- 11 くれゆけは猶立そひて海はらや 希 者 飛 者 かすみにきゆる三つのあハ嶋 可 爾 飛 阿
- 12 さえくゝて音ハ名残もなこの海の 毛 奈 乃 うら風かすむ春のゆふなミ 可 乃 奈
- 13 ミつしほもかすむゆふへのなにはかた 志 毛 可 奈 者 可 多 いふにまさりて明ほのものなし 尔 満 本 奈
- 14 くれてゆく霞の色に浪のうへの 乃 尔 能 あはときえぬるあはしま山 阿 幾 阿 者 志
- 15 おもひやるあはちはるかに松らかた 毛 飛 阿 者 可 尔 可 多 にしに山なきゆふかすミかな 尔 奈 起 可 可 奈
- 16 海原やかすみもやられてゆふなミの 可 毛 奈 乃 猶さえかへるおきのつりふね 可 乃 徒 年

政為 ※日…沖。古…おき
康親
済継
雅綱
公音
季種
爲孝 ※日…を
公條
実隆 ※阿…なみ
永宣
重治 ※日…伏…し風。 ※2日…た
和長
元長
伊長 ※日…伏…波ち(路)
守光 ※日…へ

十二日 山居子日 春の4 4

- 1 なへてよのけふは子日の松の戸に 个 盤 乃 尔 山ふかき身そひく人もなき 可 支 飛 奈
- 2 すミなる、山もはつねによハふらし 奈 累 毛 者 尔 軒はの松の百代のはる 者 乃
- 3 柴の戸の軒はの山の姫小松 者 乃 飛 可 ひかてや 礼 毛 これも千世をまつらん ※日…千世のはるかせ。伏…千世の春
- 4 たよりにもけふハ子日のまつとたに 梨 尔 遣 乃 多 尔 此山かけ 可 希 尔 徒 希 満 よ誰につけまし
- 5 君をいハふ千世はかハらし山かつの 盤 可 乃 可 ミやこそよその子日なとも 尔 阿 毛 能 本 毛
- 6 すむ身こそいつともわかぬ山松の 毛 可 可 子日にあふも春の一しほ 尔 阿 毛 能 本
- 7 山かけや子日にもれし奈のかき 可 遣 尔 毛 ひかても千代の春やこもらん 飛 可 毛 乃 毛
- 8 岩におふる小松をあけて柴の戸の 尔 阿 可 能 ミをわすれてもひく子日かな 飛 可 奈
- 9 子日より都の春やこゝろひく 与 季 乃 古 飛 松はいつともわかぬ山かけ 盤 毛 可 可
- 10 柴の戸のしはしはかりとおもふ身も 乃 能 志 是 可 利 毛 けふ千とせの子日をそする 个 寸
- 11 山里は引もうふるもとをからぬ 盤 毛 毛 松かけしめてねの日をそする 可 格
- 12 山里に身をハおもハぬ子日にも 尔 尔 契やをかまつかせのこゑ 可 可 古
- 13 をのつからけふは子日にひきかへぬ 徒 可 希 盤 飛 支 可 小松も庭の山かけの庵 毛 可
- 14 子日すと柴の戸いつるこけの袖 寸 累 奈のおもはんことはわすれて 毛 者 者
- 15 子日しにたちいつる宿の奈の松の戸も 志 多 毛 いつれのとしにひきかうへけん 尔 飛 可 个
- 16 子日する松は数そふ山さに 累 盤 佐 尔 なを春ふかくさえかへるなり 奈 越 婦 可 佐 累 奈

実隆
季種 ※日…千世のはるかせ。伏…千世の春
康親 ※高…た
済継 ※伏…阿ハ
雅綱
守光
政為
公音
為孝
永宣 ※日…ほ
公條 ※日…雪…お
重治 ※高…お。 ※2日…にひきかうへぬ。伏…とうへぬ
和長
元長
伊長 ※日…ほ

十三日 水郷若菜 春の5 5

- 1 河上ル徒につみてかへら可むわかな無にも可 世世せはいもかあ可たりとや思ふ多 志志 注日・伏・阿・をや・高・とや・御・をや・ぞ
- 2 もろ日人の若な奈つむてふ袖の色に乃 乃乃川邊の里も春を志しるらん 志志 公條
- 3 消そむる雪もけふこそみしま江に毛 毛毛あし間の若なれもとむらん 能能 康親
- 4 山水乃のなかる、すゑも乃こる古なり奈 乃乃川邊の村や若な奈つむらむ無 奈奈 濟繼
- 5 春乃のきてふれとも雪はあはつ野の能 能能みきはの若な能むれてつむ也 能能 雅綱
- 6 ありてゆく雪間の若な春といへは能 能能里はみなど奈のたれかつむらん 奈奈 季種
- 7 さと人は若なもとむと河かみの能 能能滝のいとなき春にやあるらん 奈奈 公音
- 8 つみたむる袖のうへにやはらふらん乃 乃乃みつ野、若なあ雪ぞふる 奈奈 政為
- 9 若菜つむ袖もいかにとみなせ川毛 毛毛山もとさむき霜のあさかせ 奈奈 為孝
- 10 わかな可つむ乙女可袖もたま嶋の毛 毛毛春飛ひかりに利にはふ川かせ勢 奈奈 実隆
- 11 沢邊尔にはわかなつむ成ふしミ山可 可可松の雪間を春のしるへに能 能能 永宣
- 12 けふや又のへの若な奈のかすく可 可可ふしミのさハのねせりつむらん能 能能 重治
- 13 芥川能の水のねせりのなきよも利 利利たれつミそめし岩奈とかし志 奈奈 和長
- 14 日影さしぬるむミつの、里人の乃 乃乃つむ手ひまなきふかねせりかな奈 奈奈 元長
- 15 かきわけて若なつままし下さえの希 希希ミつの、里の雪のあさあけ能 能能 伊長
- 16 雪間保はる遠方人の袖見えて ミつの、里につむわかな可 可可 守光
- 注日・わくる(分置)。注2伏：下句の「水」以下は欠落

十四日 春鶯呼客 春の6 6

- 1 谷乃の戸をまた出やらぬうくひすや越 越越なきてふるすにわれさそふらん奈 奈奈 康親
- 2 うくひすの鳴ねを乃をのかことのはに可 可可さそはれいつる心とやる乃 乃乃 政為
- 3 うくひすの音にさそはれぬつれなさを具 具具人にことハる春のたにかせ奈 奈奈 濟繼
- 4 さそはれて爰にとひこハうくいすの佐 佐佐なくねも人をよふことりかな奈 奈奈 雅綱
- 5 咲梅の枝のうくひすをのれまた乃 乃乃声にも人をさそふころかな多 多多 季種
- 6 いたつらに初音ハ多おしき谷の戸を起 起起人もとへとやうくひすのなく具 具具 為孝
- 7 うくひす飛すやわれやハあるしかくれかの春 春春こゝろもしらす人さそふらん可 可可 実隆
- 8 まつとひて花をもちきされうくひすの飛 飛飛こゑこそあるし春のふる里毛 毛毛 永宣
- 9 うくひすにさそはれきてや古郷の尔 尔尔春をもさすか人のとふらん乃 乃乃 重治
- 10 さそはれん花の下を佐はわすれしを者 者者心いられのうくひすのこゑ飛 飛飛 元長
- 11 うくひすのひととなくはいつくより飛 飛飛とふへきとをかねてしるらん奈 奈奈 元長
- 12 いまよりの心を花にあし引の万 万万山さくら戸にうくひすのこゑ尔 尔尔 守光
- 13 里越をさしはのとほそもうくひすの志 志志音にさそはれて人のとへかし可 可可 伊長
- 14 うくひすは春のあるしとなりはて、飛 飛飛宿の木末に誰を待らん奈 奈奈 公條
- 15 しへかしの鳴ねもしるきうくひすハ可 可可いとひしものと人やわすれし乃 乃乃 和長
- 16 のとかなる心の友もうくひすの乃 乃乃声聞ときそいと、またる、乃 乃乃 公音
- 注日：ほ

十五日 氷消田地 春の7 7

1	春 毛可 さてもかへさてあ 須類 らず小山田 尔 に 結 登 ふ水はよしの 古 こるとも 毛	政為
2	山川 乃毛 の水もいまはな 登奈可類 かるらん 鳥羽田 乃尔 の面にはるかせ 可 そふく 婦	公條
3	殊風 乃者 のおはな 那可奈 かなミも又やミん 雫の田井 登 は水とけ 个 けり	実隆
4	今朝 毛 も猶水 奈可 なからにせき 世起 あへぬ そは田の水 乃奈可 のなかれてそゆく	為孝
5	草 可禮毛 かくれ水もとくる小山田 尔 に つれ 徒連奈 なくむ 婦 す春 阿 のあさ 毛 しも	永宣
6	雪水とけ行 乃 すゑのおち 飛 そひて 田面 尔飛 にひろき春 能 のやまみ 徒 つ	重治
7	春 乃能 の日のミ 可 かけより 里古 こそつくハ 株 ねの す 春王 その田井 毛 も水とけ り	元長
8	春 幾 きぬと山田の水下とけて あき 李 よりさ 起尔 きに水やもるらん	公音
9	水 毛 とけもえ出る草 能 のみ 可起毛 さきも さな 奈 へにま 尔満可 かふ春 能 のあら小田	和長
10	小山田 乃 のたるひも春 尔 にとけぬらし 水 多可 のうたかた 可者 かは 奈 つなくまで	伊長
11	山かけ 可希能 の水 乃奈可 のなかれもをとたて、 田面 尔 にとくるうす水 可那 かな	守光
12	を 乃徒可 のつから水もとくるみな 見奈 と田 尔 に やかてうちい 可 つる波やミゆらん	雅綱
13	かつ 可 とくる水 累乃飛万 のひま 毛里 をもりそめて ひとり 飛満可 まかす小田の水音	康親
14	せき 速 いれん苗代 奈可 なからこほりとく 田面 者 しはしと水 於 おとすらし	済継
15	せき 世起 入し水田の水 志多 したとけて おち行 寸衛 すゑの声 幾 そきこゆる	季種
16	せかてさへ水は田面 尔満 にますらおか 心 毛 もとくる水 累奈 ならまし	

※日・伏・高・成らし(なるらし)

十六日 南北梅花 春の8 8 ※完全な句は二三首のみ。一四首目は上句のみ

1	咲梅 乃尔 の色にもしるし日 能徒 のうつる ミ 名 なミの軒 者満 はまとの北 可勢 かせ	永宣
2	月をうつす南の枝 毛 も北 尔留 に見る ほし 本乃 のひかりも 可 にほふ梅 可 か香	重治
3	名にしおふ 能 の春風吹わけて ちれ 者飛 はひらくる梅 可 か、そする	実隆
4	梅 乃 の花紅 本 にほふ日 可 かけにも そとも雪 毛能 のえたのさ 希佐 むけさ	和長
5	大内や御はし 者 の梅も 毛尔本飛毛 にほひもて 花 登多 はへたてぬきた 可 のかみ 可 かき	元長
6	同じ 奈 のミ 尔 なみと北 尔 にさく梅 乃 の を 起尔 そくとき 志 にそ春ハ久しき	公音
7	かたわけてさ 可多希 きちる梅や日 毛 の影も 南の枝 志 をさしてしるらん	伊長
8	吹 可世能 かせのさ 利可 そふたよりか中 可起 かきの 北 乃満 のま 尔毛仁本 にも 可 にほふ梅 可 か、	雅綱
9	都 尔裳可 にもかつさ 起尔个 きにけり春日 乃 の、 ミ室 佐可利奈 の梅やさ 可 かりなるらん	公條
10	くも 毛累奈 るなよ月の南 能 の梅の花 影 古那多耳本 ハこなたに 可 にほふ春風	政為
11	こし 古乃 の雪 乃尔 よしの、花 尔 の色 佐 にいて、 梅 可 さく枝のい 可 つれをかミン	康親
12	都 尔毛 にも花をそけ 奈可 なる梅かえに なれし 奈 心 乃 の色香 於毛 をおもふ	済継
13	思 留 ひやる難波わたり 多梨乃 の春風を ミやこの梅 古乃尔 にい 可 そくころかな	
14	谷 可 ふかミ木 里 こりの道 乃 のあさ 毛 ちゆふも	

※日：この部分以下欠落(「兩本如此」とある。伏：あさゆふも。※日2：季種。15・16は、為孝・守光とある

十七日 露暖梅開 春の 9 9

1	冬 ^可 かれの雪 ^乃 にか ^尔 はりて梅 ^可 かえも ^毛 つゆ ^徒 の心 ^能 の色 ^能 香 ^徒 見 ^可 せつ、	和長
2	春 ^能 の色 ^尔 に ^悲 ひとりさ ^起 きたつ花 ^多 の枝 ^起 や いく ^能 くの露 ^可 のか、 ^流 る梅 ^可 か、	実隆
3	長 ^閑 かなる夜 ^奈 のま ^乃 の雨 ^万 に ^能 さきそ ^尔 めて 名 ^乃 残 ^乃 の露 ^尔 に ^志 しめる梅 ^可 か、	元長
4	梅 ^可 か香 ^可 を忍 ^乃 ふの軒 ^乃 の霜 ^多 もいま つゆ ^尔 にと ^多 けたる花 ^志 のした紐 ^多	公音
5	今朝 ^尔 ハ猶 ^徒 つゆも ^毛 の ^可 と ^可 かに ^起 を ^可 きいて、 ^可 かつ咲 ^越 梅 ^可 の色 ^可 を ^可 みる ^可 かな	伊長
6	朝露 ^尔 にうつ ^徒 る日影 ^毛 もの ^可 と ^可 かに ^可 て 花 ^可 の色 ^可 そ ^可 ふ軒 ^可 のむ ^可 めか、	■
7	をし ^奈 なへて木 ^是 のめ ^者 は ^流 はるの朝露 ^尔 に 梅 ^多 のミ ^多 また ^起 き花 ^多 や咲 ^可 らん	永宣
8	を ^可 く霜 ^乃 のむ ^寸 すは、 ^多 れたる ^多 ふる枝 ^尔 にも 今朝 ^志 しら露 ^乃 の匂 ^个 ふ梅 ^可 か、	公條
9	い ^可 つくし ^可 かと軒 ^能 ハ、春 ^能 の霜 ^幾 き ^可 えて 木 ^衛 すゑ ^乃 の露 ^乃 に ^可 さける梅 ^可 か、	政為
10	露 ^毛 も今朝 ^毛 春 ^毛 の光 ^毛 やこ ^毛 も ^毛 るらん む ^能 め ^奈 の香 ^尔 なら ^本 て花 ^可 に ^可 ほ ^可 へる	康親
11	うち ^遣 け ^毛 ふり行 ^尔 とも見 ^志 えぬ山水 ^起 に し ^者 つえ露 ^可 け ^可 き梅 ^可 のは ^寸 つ花	済継
12	朝日 ^本 影 ^尔 のほ ^者 るこ ^可 す ^可 ゑに ^可 雨 ^可 は ^可 れて つゆ ^可 さむ ^可 からぬ梅 ^可 か ^寸 す ^可 る	季種
13	影 ^可 うつ ^希 す春日 ^起 のと ^可 け ^能 き梅 ^佐 か、の さ ^尔 く花 ^可 こと ^可 にお ^可 つる朝露	重治
14	日 ^可 のかけ ^希 のさ ^能 すか ^多 たみ ^佐 えてさ ^古 く梅 ^多 の こ ^志 、ろ ^多 と ^可 けたる枝 ^可 のしら露	為孝
15	咲 ^能 むめ ^毛 の下行 ^尔 水 ^春 もぬ ^乃 るむ ^乃 日に 木 ^越 すゑ ^志 の露 ^類 のこ ^可 、ろ ^可 を ^可 そ ^可 しる	守光
16	朝日 ^多 さ ^利 すあ ^能 た ^毛 りの露 ^奈 もく ^尔 れな ^里 るに 咲 ^本 より ^者 に ^可 ほ ^可 ふ梅 ^可 のは ^可 る風	

十八日 春鴈離々 春の 10 10

1	日 ^越 をか ^可 へて旅 ^多 たつ ^可 かり ^能 のか ^可 へる ^毛 さも お ^奈 なし ^奈 こ ^満 、ろ ^里 や ^奈 と ^奈 まり ^奈 なるらん	元長
2	つ ^徒 れてゆく中 ^多 のへ ^毛 た ^起 ても ^尔 うき雲 ^尔 に お ^可 も ^可 へ ^乃 わ ^乃 かれ ^乃 の春 ^可 の ^可 かり ^可 かね	永宣
3	を ^能 の ^徒 つか ^可 ら花 ^可 見て ^可 か ^累 へる道 ^可 や有 ^可 と を ^可 のか ^満 さま ^可 く春 ^里 の ^能 かり ^能 の行 ^可 空	公音
4	か ^加 へり ^里 ゆくこ ^可 、ろ ^可 よ ^可 い ^可 かに ^阿 あ ^可 まつ ^阿 厂 た ^毛 れも ^乃 都 ^乃 の春 ^古 を ^可 こそ ^可 と ^可 へ	伊長
5	な ^奈 れも ^毛 又 ^累 名 ^累 残 ^累 は ^累 さ ^累 そ ^累 な思 ^多 ふ ^多 か ^多 た ^多 に 雲 ^井 み ^能 の ^可 かり ^可 のわ ^可 かれ ^可 ゆく ^可 とも	雅綱
6	跡 ^尔 さ ^尔 きに ^累 ゆく ^累 は ^李 あり ^毛 とも名 ^毛 残 ^古 思 ^尔 ふ こ ^可 、ろ ^可 よ ^可 厂 ^尔 に ^可 を ^可 くれ ^可 や ^可 ハ ^可 する	政為
7	か ^可 へる ^累 さは ^累 同 ^尔 し道 ^尔 にと ^乃 ゆく雲 ^多 のへ ^多 た ^可 て ^可 よ ^可 い ^可 かに ^可 あ ^徒 まつ ^可 かり ^加 かね	為孝
8	ま ^満 てとい ^加 ふ声 ^加 かと ^加 そ聞 ^累 か ^累 へる鴈 雲 ^尔 に ^起 さ ^毛 きた ^志 つとも ^多 した ^多 ふそ ^多 ら	重治
9	横雲 ^乃 のそ ^尔 らに ^毛 も ^者 は ^奈 な ^乃 れ山 ^者 のは ^乃 も た ^尔 れに ^多 あ ^多 また ^多 の鴈 ^乃 の別 ^乃 ち	重治
10	し ^志 た ^累 は ^可 る、 ^可 た ^可 か名 ^可 残 ^類 し ^可 る厂 ^可 か ^可 ねの を ^可 くれ ^可 しそ ^乃 らに ^希 又 ^可 い ^可 そ ^可 くら ^可 ん	康親
11	か ^可 へる鴈 ^流 お ^奈 なし雲 ^毛 路 ^古 の行 ^毛 末 ^可 も こ ^乃 、ろ ^乃 く ^乃 の友 ^可 ハ ^可 み ^可 え ^可 けり	済継
12	空 ^尔 に ^起 す ^志 きは ^可 しむ ^多 れ ^多 て ^可 た ^可 つ ^可 かり ^可 は 山 ^毛 も ^奈 そ ^多 な ^多 た ^可 いま ^可 か ^可 へ ^可 るらん	季種
13	し ^志 た ^可 ふと ^可 てい ^可 つ ^尔 れ ^可 か春 ^満 にと ^可 ま ^可 らし ^可 を を ^可 くる、 ^乃 厂 ^乃 の行 ^毛 も ^可 かな ^奈 しき	■
14	い ^尔 そ ^毛 くに ^毛 や ^毛 とも、 ^可 おも ^可 ハ ^可 て ^可 かり ^可 かねの お ^奈 なし道 ^尔 にも ^可 ゆ ^可 き ^可 わ ^可 かるらん	公條
15	行 ^衛 ゑ ^奈 なき ^乃 た ^奈 か玉 ^乃 章 ^奈 のあ ^可 と ^可 なら ^可 ん か ^可 きも ^毛 つ ^毛 ら ^毛 ね ^毛 ず ^毛 か ^可 へ ^可 る厂 ^可 かね	守光
16	つ ^徒 れて ^可 ゆく ^毛 数 ^可 も ^乃 か ^乃 す ^多 みの ^尔 た ^奈 え ^乃 く ^乃 に ^可 な ^奈 く ^乃 なる ^乃 厂 ^乃 の思 ^可 ひ ^可 を ^可 そ ^可 し ^可 る	実隆

廿一日 柳無氣力 春の13 13

- 1 水鳥の波にしられぬはかせさへ みえてかたよる青柳のいと
乃 志 者 可 可 多
 - 2 春風もやとるとハなしくちのこる 老木の柳いとミたれつ、
毛 累 奈 古 留 能 多 徒
 - 3 露にさへなひく柳の枝をよハみ かせにはたえすなをそミたる、
尔 奈 飛 累 乃 可 可 世 能 奈 多 留
 - 4 吹音はきこえぬはるの朝かせも やとるにしるき青柳のいと
盤 幾 古 者 累 乃 可 可 裳 累 尔 志 起
 - 5 春風のふかぬたえまも朝つゆの 末葉かたよる青柳のかけ
農 可 可 毛 可 多 累 可 遣
 - 6 露をこそつれなくハみれ青柳の いともはかなき春の朝かせ
古 徒 連 奈 連 乃 毛 者 可 奈 起 可 勢
 - 7 あまの子はふりわけかみもひくふねの よハき繩手になひく青柳
阿 万 盤 利 希 可 毛 飛 年 乃 奈
 - 8 みるほとそしつ心なき花ならぬ 柳か枝をかせにまかせて
累 本 志 奈 支 奈 可 尔 満 可 世 天
 - 9 つハめ飛川そむ柳はかせにも みたれやすきををのかすかたに
可 者 可 尔 毛 幾 遠 能 可 寸 可 多 尔
 - 10 寒からぬ風のけしきも身にシミて なひくにたえぬ青柳のいと
可 希 起 裳 志 奈 飛 尔
 - 11 をのつから末葉におつるつゆにたに 枝まつつくく春の青柳
徒 可 尔 留 尔 多 尔 古 乃
 - 12 青柳の心よはくもなひくこそ 春ふく風のすかたなりけれ
乃 者 毛 飛 古 奈 飛 幾 毛 乃 寸 可 多 奈 利 个
 - 13 風わたる川そひ柳かたよりに なひきもあへすかゝるしらなミ
多 累 飛 可 可 李 尔 奈 飛 幾 毛 寸 可 累 奈
 - 14 さそひても音こそなけれ青柳は なひくをかせの色にミせつ、
飛 毛 古 奈 个 盤 奈 飛 可 可 世 能 尔
 - 15 吹かせのたえ間をみるも青柳の なひくハをのか心つつからを
可 乃 奈 可 裳 飛 具 可 徒 可 越
 - 16 若草のなひくたにあり春かせに つゝミの柳さそなミたれん
奈 飛 多 尔 里 可 世 徒 佐 奈 多
- 和長 政為 伊長 守光 重治 公音 公條 濟繼 春日・伏・高・10と11の順序が逆 ※阿：曙

廿二日 旅泊春雨 春の14 14

- 1 まくらかる浪しつかなる春雨に 苦の雫ぞおつるひまなき
満 可 累 志 川 可 奈 尔 乃 飛 奈
 - 2 音せても逢の雫やなみまくら まきれぬよるの春雨のそら
音 奈 満 支 能 乃 多 尔 毛 支 祿 乃 者
 - 3 ほしわひぬすまいのそやの浪たにも うきねの袖のよるのはるさめ
飛 能 能 乃 多 尔 毛 支 祿 乃 者
 - 4 をともなき浪のとまりのはるの雨 それもやさハるゆめのふるさと
毛 奈 起 満 梨 能 者 毛 累 布 佐
 - 5 こきよせてたのむとまりの一むらも あめにかすめる浦の夕波
古 起 多 満 毛 希 里 尔 可 累 累
 - 6 旅ころも船にぬるよしほれけり 野山の外の春雨のそら
古 尔 累 毛 志 本 希 里 満 毛 累
 - 7 しはしたに夢やハ見えんとまりふね とまもる雨のよるの枕に
志 者 多 尔 満 里 年 満 毛 累 尔
 - 8 こきよする船もさハラぬ芦のはの みしき夢やはる雨のそら
古 起 毛 者 能 可 幾 者 累 者
 - 9 かち枕磯うつ波のもののうきに さひしさそふるよはのはるさめ
毛 乃 起 尔 飛 流 者 者
 - 10 ふるとしも雨をハしらてかちまくら 音する波そ春にとけき
婦 毛 志 満 音 可 可 支
 - 11 波まくら春の夜ななき思ひねに 又ふりいつるあかつきの雨
満 乃 奈 可 起 林 尔 里 可 可 支
 - 12 春の雨もいかにもりけんナミまくら 篷のひまゝあくる光に
乃 毛 可 尔 毛 里 个 奈 満 飛 阿 尔
 - 13 春雨のふるさと人もおもひしれ ナミのまくらたえぬ雫ハ
乃 乃 佐 毛 飛 志 奈 乃 能 能
 - 14 とまり舟篷の雫のつくくと 雨き、あかす春のよなかさ
満 乃 乃 能 徒 雨 可 可 乃 奈 可
 - 15 聞わひて夢路むなしき波枕 またやさハラむ夜の春雨
王 奈 多 奈 日 高 守 光
 - 16 一夜たに波のうきね問わひぬ かくてはいか、春のなかあめ
尔 乃 起 祿 飛 可 可 盤 可 可 乃 奈 可 阿
- 康親 春日・公音 日・高 守光 ※日により補充 内閣本・伏・高にはなし ※□（ネノマ）：日・伏・高に

廿三日 行路春草 春の15 15

- 1 春もさそとハれぬ道のあとミする 蓬のかれはのこるくさはに
毛 乃阿 者尔
- 2 もえいつる隙もとめゆく道たにも すゑハひとつの春の若くさ
毛 多尔 乃
- 3 わくるともおもはぬ草のすゑはよりも すそにしめる春の朝露
累 毛 春衛者里毛 尔志
- 4 ふミなれしわかなつむ野の道のへに 下もえかねて草そミしき
奈 可奈 毛 可年 可支
- 5 分てこそえいつる色もしられけれ うへハふる葉の野への道しは
古 毛 志 希 能 者
- 6 春ふかくかすみにもえてかみちのへの 行かへるさにとりそふらん
婦可 可 尔 毛 累 万 毛 連可 可 無 春
春ふかくかすみにもえてかみちのへの 行かへるさにとりそふらん
※日：かれす（イすれて）。伏：かれす。
- 7 初草のいかにもえてかみちのへの 行かへるさにとりそふらん
可 尔 毛 累 尔 李
- 8 うつりゆくこゝろよいかにあさみとり 道はまよはぬ野への若草
徒 梨 古 可 尔 阿 盤 満 者
- 9 道のへのしるへにむすふ程もなし はつかにもゆる春の若草
乃 志 尔 毛 奈 者 可 尔 毛
- 10 一本もまたそれならて分る野の あをむかれふや春の若草
毛 満 多 奈 累 可 可 乃
- 11 もえいつる草はをミてもおもふそよ 跡はたえせぬ道も有けり
毛 者 越 毛 毛 盤 世 毛
- 12 時し有と青を踏し草の上も はてハゆき、の道によくらん
越 能 毛 尔
- 13 霜かれも又春風のあさみとり これや時世のミちしはの露
可 毛 乃 累 乃 乃 志 者
- 14 きえそむる雪間もとめて道のへに はや下もえの草そ色めく
幾 毛 尔 者 毛 乃 乃
- 15 すゑとをき霞の袖もみとりにて ゆくてにかゝるのへの若草
衛 越 支 乃 毛 梨 尔 尔 可 留 乃
- 16 春ふかきかけともしらて朝霧を あさくやわくるのへの若草
婦可 起 可 毛 志 乃
- 和長 康親 済継 元長 雅綱 守光 政為 為孝 重治 永宣 季種 公音
- ※日：伏・高は16・15の順

廿五日 花下送日 春の17 17

- 1 ゆくかへりよのまばかりのあるしにて わか宿うとき花さかりかな
可 遍 満 者 可 李 阿 累 尔 可 可 奈
- 2 をの、えもくち木の花のかけしめは 日をふるほとん幾世ならまし
毛 乃 乃 志 者 本 奈
- 3 けふいくかなれし日数よ春かせも た、まくおしき花のかけかな
个 可 奈 可 可 毛 可 可 那
- 4 色にそむ心つからやをくりむかふ 花の木かけになき日もなき
尔 可 可 可 尔 奈 可 支 毛 奈
- 5 けふくんと春の日数をなめきて うつろひかハる花の木のもと
遣 可 奈 可 幾 可 能 毛
- 6 木のもとになれゆくまゝ、の日数さへ うつるてふ名の花にかなしき
毛 尔 奈 満 可 可 奈
- 7 花にこそ命を思へきのふといひ けふとくらすはおしからぬ身を
尔 古 者 幾 飛 个 須 盤 於 可
- 8 見ぬかたに枕かへてもけふまては おなし山路の花の下ふし
可 多 尔 可 可 希 盤 奈
- 9 奥ふかくさきそふるまゝ、にみよしの、 花にいく日の春をつくさん
婦可 起 尔 见 能 徒
- 10 在明になるまで花をミつるかな 山路わけこし月の夕かけ
尔 奈 徒 可 那 希 古 可 希
- 11 思ハすもけふはといひていく日をか た、かりそめのはなにくらせる
毛 希 盤 飛 可 梨 能 者 尔 世 流
- 12 けふいくかわれこそミねの雲たにも ゆふへハかへる花のかけかな
个 可 可 古 称 多 尔 毛 可 可 那 可 那
- 13 立さらす心うかれてはることに くらすやいくかはなのしたかけ
可 可 者 古 尔 須 可 者 奈 尔 志 多 可
- 14 花にきてけふをいく日とおもひけん ささちるほとハ時のまにして
尔 个 飞 本 尔
- 15 此ま、にとしのミとせも花のかけ よし野よ、すといふもこそあれ
尔 能 毛 可 可 毛 毛
- 16 さく桜ちるまてなれてよし野山 よしや花にもよをやつくさん
累 奈 尔 徒
- 元長 雅綱 守光 伊長 公條 実隆 政為 康親 重治 永宣 済継 公音 季種 和長 為孝
- ※日：の裾。伏：すそ。高：よ、す

廿六日 落花入簾 春の18 18 原本あり。

- 1 隙とめて散くる花を玉すたれ まきの戸はその雪とみるまで
2 よきてふけさそハぬさへに玉すたれ ひまもとめくる花のしたかせ
3 さそひこハよし玉たれの内外なく 花にゆるさん春のやまかせ
4 さそひくるいつくのかせそ玉すたれ かけてもしらぬ花の色香は
5 散かふや音なきかせも玉たれの ひまもとめくる花のしら雪
6 花散て今朝なをつらし玉すたれ まくらの夢ものこる春風
7 色も香も内外をかけてちりくるや 花の袂のこすのをひかせ
8 をしあてのにはひはかりもこすのうちに 花とはいはん花ぞ散くる
9 風は猶吹そたゆまぬ玉すたれ ひまもる花のひまハあれとも
10 散きては袖にそつもる玉すたれ 吹まく風の花のしらゆき
11 はかなさを何そとへハ玉すたれ つゆよりもろく花ぞちりける
12 よしやさハ風もうらみしこすのまに 木のもとしらぬ花ぞちりくる
13 花やさき風やさきにとこすのまの 人のにはひにひかれゆく色
14 一かたにいか、うらみん玉すたれ ひまもる花の風のたより
15 玉たれのひまもとめてもさそひくる 花にまたる、風もこそあれ
16 おしめとも花吹いる、たますたれ みとりを木、にかへすはる風

雅綱 日・原本…よ
伊長
実隆
為孝
重治
永宣
季種
※御…お、※2阿…の
※阿…色
守光
公音 ※日・原…く
元長
和長
康親 ※日・伏・原…を、高…に
政為
公條 ※雪…を

廿七日 桃花曝錦 春の19 19

- 1 おりあふ春のにしきとさくも、や 柳さくらにたちかかねてん
2 うすこきミちよの花のからにしき きてかへらはやあかぬ木かけを
3 又とは、たちやかへましさく桃の ミなも、ならぬ花のにしきも
4 古郷に花さくも、はたか袖を 入日にかへすにしきなるらむ
5 相思ふにしきとも見る色なれや 物いはぬも、の花のうへをも
6 ふるさと、なりて花咲も、そのに たかぬきかくるにしきなるらん
7 一村のにしき色こき日かけかな も、さくころの里のこすゑに
8 桜花ミやこにさらすにしきをハ も、さく山の木末にも見つ
9 今もそのにしきおりはへも、その、 花のむかしぞおもひしらる、
10 さくも、のたくれなるの色はへて をる人しらす錦なりけり
11 野も山も、さく春のにしきをは 柳桜のほかにもみすらん
12 みる人もまねなるも、の花のかけ 夜のにしきの名にやた、まし
13 故郷にきてかへるへきにしきとや くれゆく春にも、のさくらん
14 けふの日のあかすくれなはさくも、の 花もやよるの錦ならまし
15 たてぬきの光をそへてさくも、の 花のにしきををるほかけ哉
16 花をミてかへるいはぬ人ハなし たもとも千々の錦たちきて

公條 ※日・伏…を
政為 ※2阿…とこせ
康親 ※日・伏・高…と
重治
元長
済継
永宣
為孝
伊長
和長
公音
雅綱
守光
季種
実隆 ※日…桃、版…千々、阿…ならまし

廿八日 留春不駐 春の20 20

- 1 いか^可かにせんととまらぬ春^にのこる身^のをくれしとするもミぬ別^ににて
※阿^の。※2御^お
- 2 あかすおも春もとまらぬ花^とりのあとハ心やかたミならまし
- 3 あつまよりくるにさハラぬ春なればかへるもとめぬあふさかの関
- 4 いかなれはあひも^もはて行春を^はしたふこゝろもとまら^るらん
- 5 風^にうらミ雨^におもひしこゝろのミはかなき花の春はくれけり
- 6 おもひしる春や行らんとまるともかきりしあらハおなし名残を
- 7 よには猶^はつらき別もありとのミしたふを春のしらすかほなる
- 8 春よまでしたふにとまるかたもあらはたれゆくにかと又やうらみん
- 9 山川の花のしからみ雲かすミなに、かけてか春はとまらん
- 10 よしの河なかる、水や行春のこゝろをしたふ人に見すらむ
- 11 したひてもとまらぬ春のかきりをハ心^にのミやなをのこさまし
- 12 身^につもる年ともいはし春はかり思ふなこりのたくひやハ有
- 13 あふさかの関守もなとこしかたにかへらは春をとゝめさるらむ
- 14 くる、春も又あらたまるものこをなけくわれのミ身ハふりねとや
- 15 馴く^て何をかたみと思ハまし花ものこらぬ春のわかれば
- 16 春よいましはしたにもうらミはやいふにやすらふミはなくとも
- 済継 ※阿^り
- 季種
元長
雅綱
公音
永宣
康親
為孝
公條
実隆
伊長
政為
重治
和長
守光

廿九日 羈旅更衣 夏の1 21

- 1 思ひやる山路露けしみやこにもけふはかけむ花そめのそて
- 2 花染のおしきのミかハミやこ出し名残の袖もたちわかれぬる
- 3 春もおし名残はいつれみやこいて、けふたちかふる旅のころも手
- 4 朝夕の露にやつる、たひころもけふたちかふる旅のころも手
- 5 我^かへて衣手^うすしやまかせもけふのかりねまこゝろしてふけ
- 6 しほれこし山分ころもかへまくもおしとハいはしけふを待えて
- 7 花の色をおしむのミかハたち出しみやこの春のころもかへして
- 8 かふるをもうしとハいはしたひ衣都の春の花ならぬそて
- 9 古郷の春のへたと花そのの外にかへまくおしきそてかな
- 10 時しあればけふこそかへめなつころもたひのやつれの袖ならすとも
- 11 花そのの袖やしはしもかへさらん旅は月日の行ゑなきにも
- 12 かへてたにつゆやはさん夏衣たもとも草のまくらかる野に
- 13 露けさはかへてやまさる旅衣野山の春のわすれかたミに
- 14 たちかふる春のころもわかれさへつゆけきものを草の枕は
- 15 しはれても春のかたミはけふ更にかふるにあかぬたひ衣かな
- 16 たひ衣かるきかうへにたちかへて更にや身にも夏をしらまし
- 為孝
永宣
公音
政為
重種
和長
済継
康親
重治
公條
伊長
守光
雅綱
名隆
実隆
- ※御・阿^を
※日・雪^{ぬき}、伏^こ裁^は阿^{たち}高^我、我^を、し

三日 寢覚郭公 夏の4 24

1	折しもあれね覚の床の一こゑは 折乃 古衛盤 まつにまされるほと、きすかな 尔満 累本 寸可奈	雅綱
2	かたらふも猶あさからぬなさげかな 可多 毛 可可 奈 可奈 ねさめをときの山ほと、きす 奈 本 寸	季種
3	郭公ね覚はをのかためとしも 奈 可 毛 しらてや過るよ半のひとこゑ 志 累	伊長
4	霍公いくよなくのねさめにも 奈 乃 尔 この一こゑをおもかけにせん 古乃 古 毛可 尔世	実隆
5	杜鵬おもふるたひになきてこは 飛 尔 奈 者 ねさめかちなる身をもうらミし 奈 可 奈 留	政為 ※阿・古…か
6	ねさめするおりしりかほにかたらふや 奈 利 志 里 可 本 尔 可 よにたくひなき山ほと、きす 奈 支 本 寸	公條
7	ほのかなる山ほと、きす一こゑを 本 可 奈 留 本 寸 古 おなしね覚のたれかとハまし 奈 尔 乃 多 可	重治
8	鳴すて、何を名残の子規 乃 能 ねさめのまくら月たにもなし 奈 多 毛 奈	康親
9	一こゑのさたかならぬや郭公 古衛乃 多可奈 きくよりさむる夢路なりせは 里 奈 利 世 者	済継 ※阿…も
10	うらみしを思ひしれはや郭公 飛 志 者 こよひはまたぬねさめとふらん 飛 盤 満 多 奈	永宣
11	郭公なれもねさめのよころとや 奈 毛 奈 乃 古 おなしあかつきの空になくなり 奈 可 乃 尔 奈 奈	公音 ※日…夜明 版…晩
12	おもひねにき、しやりつ、さめて後 於 毛 飛 年 尔 夢はかりなるほと、きき哉 者 可 梨 奈 額 本 支	元長 ※「す」の誤り
13	爰にしもぬる夜をしらてほと、きす 毛 志 本 支 数 をそくも夢の後に聞つる 尔	為孝 ※阿…なくねをしわて ※日…に
14	子規なれて聞へきやまさとの 奈 遍 起 佐 あらましおもふねさめをぞとふ 阿 満 奈 越	守光
15	老もはや枕にかき郭公 毛 者 尔 可 起 いつれをとろくねさめとかし 連 路 奈 免 可 留	和長
16	郭公ねさめのなミたおちかへり 奈 能 奈 多 なくねのかすはなとかすくなき 奈 可 盤 奈 可 奈	

四日 盧橘子低 夏の5 25

1	軒ちかく枝うちなひきたち花の 可 奈 飛 みさへ花さへかほる夕かせ 可 本 可	元長
2	ちる花はけにかろき名にたち花の 盤 希 可 支 尔 多 乃 ミをむすひける陰の木ふかさ 飛 个 可	政為 ※阿…の
3	染ぬへき色をはなしにたちはなの 盤 奈 尔 者 那 乃 ミさへ花さへあめおもけなる 毛 奈	康親
4	ちりてさへ花の名残か枝をもミ 乃 可 毛 露うちなひきにほふたちはな 奈 飛 尔 本 多 者	伊長
5	いもか袖にぬくやさ月の玉とミて 毛 可 尔 花たちはなのミさへなつかし 多 者 奈 能 奈 可	実隆 ※阿…か
6	花ちりて雨ををけなるたち花に 本 毛 奈 尔 能 霜のはやしもみる心ちして 奈 飛 可 毛 志	公條
7	ほともなく花散枝にたち花の 本 毛 奈 尔 能 ミさへなひくかおもきしらつゆ 奈 飛 可 毛 志	重治
8	雨はなををもくや見えんたち花の 盤 奈 越 毛 実さへ数そふ枝のしけミに 志 尔	済継
9	をのつからはな橘のはなのす、 可 者 奈 乃 者 奈 枝もたハ、にふむ鳥もなし 毛 耳 毛 奈	和長
10	花もみもことしみそむる橘の 毛 毛 古 乃 わか枝におもき雨の夕風 可 尔 起	永宣 ※日…葉
11	実をむすふ花たちはなに降雨も 編 多 者 奈 尔 毛 したてる色をそむるとハなし 志 多 遠 奈	
12	村雨の名残の露もたち花の 乃 毛 多 ミさへ花さへなひく枝かな 奈 飛 可 奈	雅綱
13	おもくみるつゆのさ枝ははなもミも 毛 留 徒 盤 者 那 毛 毛 にほひをくれぬ軒の橘 本 飛	為孝
14	のにしけりみるかうちにもたち花の 里 可 尔 毛 みとりなる枝に花のむかしを 里 奈 尔	季種
15	雨はれ木すゑの露や残るらん 奈 衛 ミさへ花さへにほふたち花 尔 本 多 多	守光
16	橘のミさへ花さへしけりあふ 乃 志 个 利 枝おもけなる雨のあさつゆ 毛 奈 乃	公音

五日 民戸早苗 夏の6 26

1	うへわたすけふの早苗のつゆの袖	ほさても田子の秋を待らん	実隆
2	早苗とる外にひまなき民もなし	つかふ時ある道もしられて	済継
3	外よりも先うへたてし程見えて	門田の早苗しけりそふか	重治
4	民の戸のむろのはやかせとるなへに	爰にやまたん秋の初かせ	和長
5	早苗とる田子のこゑくくる、日を	われもおしとや蛙鳴らん	政為
6	うきわざにわかせたのしむ民のとな	うたふ声してさなへとるらん	永宣
7	かけしむる門田のさなへうふるより	稲葉のいほもミる心ちして	為孝
8	いそかる、心のたねもととりそへて	田子のさなへやうへわたすらん	公條
9	秋の色やまたきミゆらんうへわたす	門田のさなへ露ふかくして	季種
10	家くの門田のあきもとをからす	あせをへたて、とるさなへかな	康親
11	うへわたすしつか心も一むらと	のこる門田の早苗にそしる	雅綱
12	日ころへてふし立ぬらし民の戸の	あくるをそしととるさなへ哉	元長
13	門田よりとりしさなへのけふははや	千町のすへに人さハくなり	公音
14	立いて、よそに見るたにさなへとる	しつか門田のしつこ、ろなき	伊長
15	日数へてうふる門田のさなへにハ	をくれさきたつみとりをそミる	守光
16	うへわたす門田のさなへとりくに	心は床にまつかよふらし	

六日 杣五月雨 夏の7 27

1	斧の音は絶てほとふるさミたれに	ひかぬ杣木をくたす山川	済継
2	筏士ハ水かさもしらしそま川や	雲に棹さす五月雨のころ	和長
3	さミたれに杣のかりやハ人もなし	それも杣木の名にやなかれん	政為
4	五月雨や日ころは波をせく石も	下になかる、ミおの杣川	永宣
5	五月雨にひかぬ宮木も杣川の	水のひ、きに山ひこのこゑ	公條
6	時しありと杣川のさミたれに	いつの朽木のなかれいつらん	季種
7	河瀬をハくたさぬ山のさミたれに	杣木や雲の浪にうくらん	実隆
8	声たて、た、河波や杣木引	山路たえたる五月雨のころ	康親
9	さミたれの川せをはやミくたしてや	杣木こる身のうさもわする、	重治
10	引すてし杣木やくたす山川の	せ、に落そふ五月雨のころ	雅綱
11	そこなく水もいつミの杣川に	くたすミや木も五月雨の比	伊長
12	うきわざになれてもさそな杣木引	山路の奥の五月雨の空	元長
13	五月雨の日をふるま、に引すて、	朽木の杣といひやそめけん	為孝
14	とりつくす杣木のとともる雲の	は山しけ山さミたれの比	公音
15	そま川や筏の床による波も	なを音まさる五月雨の比	守光
16	をのえはくらもやすらんハいたつらに	日をふる杣の五月雨の比	

七日 湖五月雨 夏の8 28

1	あまはいさうミふくらひの山風に 阿万盤 婦 尔 かへるともみぬ五月雨の空 能	※阿…波 ※2阿…雲 御…空（頃）。
2	むかふにも何かか、みの山ならん 麓のうミのさみたれのそら 能 見多	
3	さみたれハ雲やしかつの濱松に 志 可 能 尔 さ、波よするかせたにもなし 可 多 尔 奈	
4	五月雨はまの、入江にこす波の 色をおはなに秋風そふく 盤 尔 古 者 奈 婦	
5	五月雨に見るめも浪の海こしや 山はか、ミのかけもわかれす 尔 累 毛 古 盤 可 乃 可 可	
6	雲うつむそなたやひらのうミやまも へたてぬ雨ハ五月なりけり 奈 多 飛 毛 多 奈	
7	田子のうらやあらぬ渕なる五月雨に 底さへにほふ花ハのこらて 乃 阿 奈 尔 本	
8	しかの浦や雲のなミのミかさなりて 水かさもみえぬ五月雨のそら 志 可 奈 乃 奈 可 毛	
9	五月雨の雲をかさねて水うミの 水のけふりもはれまなき比 可 祢 乃 希 毛 者 奈	※日…伏…湖の海 高…水うミ
10	五月雨のうき雲のほるみつうミに ほとの水とや又くたたるらん 乃 本 耳 毛 多	※日…にはの海 伏…湖
11	水をそわたるとハみしすはの海や 又雲とつる五月雨の空 多 者 能 奈	※日…頃。伏…比。高…空
12	五月雨に苦ふく舟の行末は 雲こそおほへしかの浦なミ 尔 布 乃 盤 古 志 可 奈	
13	から崎や松はひとつのミキハにも あらぬ波こす五月雨の比 可 盤 飛 尔 毛	
14	か、み山かけみるうミによるなミも くりはてたる五月雨のそら 可 可 希 見 流 尔 類 奈 毛 李 者 多	
15	しほやかぬ袖もほさしなしかのうらハ 波のいく重の五月雨の比 志 本 奈 志 可 乃 能	※日…や。伏…高…は
16	五月雨にしけるす、きもミカくれて 吹かたしらぬまの、うら風 尔 志 毛 可 可 多 志	※日…、か。伏…高…く
	康親	

八日 鵜舟廻嶋 夏の9 29

1	嶋かけのそなたになりぬ河上の さとのう舟やさしかへらん 可 希 乃 奈 多 尔 奈 佐 可	
2	あはれいかに明やすきよのうかひ舟 嶋かくれゆくほとやなからん 阿 者 可 尔 春 起 可 可 本 奈 可	
3	心をやこのせひとつにかハしまの 行めぐりてもう舟さすなり 飛 尔 可 満 奈	
4	か、り火 影そきえ行かうかひ舟 今や嶋かけこさめくるらし 開 梨 幾 可 可 可 可	※阿…ハ。 ※2阿…おき。
5	夜と、もにさすやう舟のか、り火は やミに明ゆく嶋かけもなし 毛 尔 可 可 盤 尔 可 奈	※日…世。 版…せ。 伏…高…夜
6	うかひ舟月も朝霧あくるよに なを嶋かくれおもひゆくらん 可 毛 尔 可 可 飛	
7	河しまのなかれ州とをミうかひ舟 めぐりもはてすあけぬ此よハ 志 奈 可 越 可 可 里 毛 者 寸	
8	うかひ舟水の河嶋ゆきめくる かけもかくれぬよのか、り火 可 飛 可 可 可 可 里	※阿…ハ
9	大井川見やうふねのともす火の 明石もさそと嶋かくれゆく 祢 毛 能 毛 可 可	※阿…元長の歌と誤る。 ※2御…に
10	川駕のこなたかなたのうかひ舟 月のよころもかけや有けむ 乃 奈 多 可 可 古 毛 希 無	
11	めぐりこんやミもいくよそうかひ舟 くらきより猶くらき嶋かけ 毛 可 可 起 李 可 可	
12	河駕やめくるもはやきうかひ舟 思へむくひのか、りける世を 累 者 幾 可 可 飛 可 李 个 越	
13	うかひ舟のほれはくたる川駕の こなたかなたのか、り火のかけ 可 飛 本 者 多 奈 多 可 可 可 希	
14	河駕をめくるう舟になすつミの むくひもかくやほとなからまし 尔 奈 寸 可 可 本 奈 可	
15	河よとやくたすう舟の嶋かくれ きえぬか、りの影そあとなき 多 可 可 幾 可 里 奈	※日…高…上。 伏…追
16	おなしせにしけきか、りや川駕の へたつる波のう舟なるらん 奈 世 尔 志 希 起 可 里 遍 多 奈	
	康親	
	季種	

九日 連峯照射 夏の10 30

- 1 道^可かへて鹿^毛や行^毛らんともしする 山^盤はきのふの^乃みねの遠^可かた 永宣
- 2 峯^徒つ、きたえぬ^本ほくしのまつ^乃よ^飛ひに ^可いかなる鹿^奈の身^可をかくすらん 実隆
- 3 影^毛うつる峯^毛よりミ^毛ねに^志ともしして もら^毛さしとのミ鹿^毛やまつらん 雅綱
- 4 さ^佐そと見る^毛まつおの^毛ともしよをか^年さね ^年ミねをか^可さねてあ^可かするし^可さ 政為
- 5 ともし^数するは山^者のす^衛ぬの峯^徒つ、き ^年あくる烟^尔そ雲^尔に立^可そふ 伊長
- 6 の^可かるへきを^可しかの道^可とを^古ち^可この 峯^毛をのこ^寸さす^毛ともし^寸さす^可かけ 元長
- 7 何^尔方^毛におもひ^可かよらん^可さを^可しかも ^年おなしなミ^奈なる峯^毛の^毛ともし^毛火^者 為孝
- 8 も^毛れてゆく^奈鹿^可やな^毛からんと^毛もしする ^年まつを^毛もミ^年ねも^毛ひとり^者なら^者ねは 康親
- 9 さ^佐を^可しかの妻^奈待^徒なれし^毛峯^毛つ、き ^毛あらぬ^毛ともし^毛のか^志けした^多ふらん 公條
- 10 棹^乃鹿^里のひとり^飛思^乃ひを^能遠^本近^可の 峯^毛のほ^可くしに^可たき^可あ^可すらん 重治
- 11 あ^阿は^希れけに^尔い^遠つれの^能峯^毛の^尔ともし^可にか ^毛野^尔に^毛ふす^毛鹿^毛も^毛心^毛よ^毛すらん 和長
- 12 鹿^毛を^毛待^毛幾^毛重^毛のミ^毛ねも^可おく^可ふ^可かく ^毛ともし^毛す^毛ほ^毛く^毛の^毛かけ^毛に^毛み^毛え^毛けり 季種
- 13 夜^可の雲^奈かさ^尔なる^希峯^毛に^可かけ^毛えて ^毛のこ^毛ともし^毛を^毛外^毛山^毛に^毛や^毛ミ^毛ん ^毛※を^毛の^毛。 ^毛※2ミ^毛ん^毛す^毛む^毛。
- 14 ま^可かへて^志ハ鹿^須も^毛しらす^毛やと^毛もしする ^多峯^徒たち^本つ、く^毛ほ^毛しの^毛光^毛に 公音
- 15 あ^阿けぬ^可るか^阿峯^多も^毛あ^毛また^毛に^毛み^毛し^毛影^毛の ^奈き^毛えて^毛す^毛く^毛な^毛く^毛の^毛こ^毛る^毛ともし^毛ハ 濟繼
- 16 よ^累る^毛鹿^阿のともし^尔あら^年ハに^毛ミ^毛ね^毛つ、^支き ^阿あ^多は^毛れた^毛ち^毛と^毛を^毛雲^毛も^毛かく^毛さ^毛ぬ ^毛※日^毛…所^毛… ^毛※2日^毛…伏^毛…高^毛… ^毛※2日^毛…伏^毛…高^毛… ^毛守^毛光

十日 里蚊遣火 夏の11 31

- 1 か^可やり^毛たく^毛おも^毛ひ^毛つ^毛き^毛せ^毛ぬ^毛山^乃里^乃の ^毛よ^毛る^毛の^毛け^毛ふ^毛り^毛や^毛峯^毛の^毛朝^毛霧 類希
- 2 夕^希け^毛ふ^毛り^毛か^多た^尔ミ^毛に^毛た^毛て^毛し^毛栖^毛居^毛に^毛も ^毛か^可やり^毛す^毛ゑ^毛ハ^毛わ^毛か^毛ぬ^毛里^毛か^毛な 康親
- 3 ミ^可しか^毛よ^毛も^毛あ^毛かし^毛や^可か^毛ね^毛ん^毛夕^毛煙 ^毛雨^毛うち^毛し^毛める^毛宿^毛の^毛か^毛や^毛り^毛火 実隆
- 4 い^可かに^毛たく^毛里^毛の^毛か^毛やり^毛そ^毛す^毛む^毛人^毛も ^毛む^毛せ^毛ハ^毛、^毛お^毛なし^毛よ^毛半^毛の^毛煙^毛を 永宣
- 5 な^奈へ^多て^多たく^毛里^毛一^毛村^毛の^毛か^毛やり^毛火^毛や ^多た^毛つ^毛か^毛煙^毛も^毛雲^毛霧^毛の^毛そ^毛ら 政為
- 6 夕^毛ま^毛くれ^毛か^毛やり^毛に^毛た^毛つ^毛る^毛う^毛す^毛煙 ^毛里^毛わ^毛く^毛は^毛かり^毛う^毛ち^毛な^毛ひ^毛き^毛つ、 伊長
- 7 心^奈なき^毛し^毛つ^毛か^毛わ^毛と^毛や^毛夕^毛か^毛ほ^毛の ^毛花^毛も^毛あ^毛ハ^毛れ^毛に^毛か^毛やり^毛たく^毛か^毛け 和長
- 8 奈^累原^毛のお^毛く^毛ある^毛里^毛の^毛う^毛す^毛け^毛ふ^毛り ^毛よ^毛ふ^毛か^毛く^毛た^毛つ^毛や^毛か^毛やり^毛なる^毛らん 元長
- 9 あ^阿ま^毛の^毛す^毛む^毛里^毛の^毛し^毛る^毛へ^毛も^毛な^毛へ^毛て^毛今 ^毛か^毛や^毛う^毛に^毛わ^毛か^毛ぬ^毛夕^毛暮^毛の^毛室 為孝
- 10 け^希ふ^毛り^毛を^毛も^毛月^毛に^毛は^毛た^毛て^毛し^毛此^毛里^毛に^毛 ^毛た^毛、^毛よ^毛い^毛の^毛間^毛の^毛か^毛やり^毛火^毛の^毛影 守光
- 11 か^可す^毛か^毛に^毛て^毛す^毛む^毛よ^毛し^毛ら^毛れ^毛ぬ^毛か^毛け^毛も^毛猶 ^毛け^毛ふ^毛り^毛ハ^毛見^毛えて^毛蚊^毛遣^毛たく^毛らん 濟繼
- 12 山^毛本^毛や^毛一^毛む^毛ら^毛の^毛こ^毛る^毛夕^毛け^毛ふ^毛り ^毛猶^毛里^毛わ^毛き^毛て^毛か^毛やり^毛たく^毛らし 公音
- 13 この^毛比^毛や^毛か^毛やり^毛た^毛て^毛そ^毛ふ^毛夕^毛け^毛ふ^毛り ^毛よ^毛そ^毛め^毛に^毛き^毛は^毛ふ^毛を^毛ち^毛の^毛里^毛人 公條
- 14 か^可やり^毛火^毛の^毛け^毛ふ^毛り^毛に^毛も^毛み^毛よ^毛わ^毛ひ^毛て^毛す^毛む ^毛人^毛ハ^毛お^毛ほ^毛かる^毛里^毛の^毛あ^毛ハ^毛れ^毛さ 重治
- 15 雲^毛を^毛さ^毛へ^毛いと^毛ふ^毛へ^毛き^毛よ^毛の^毛月^毛に^毛な^毛と ^毛里^毛の^毛か^毛やり^毛の^毛煙^毛た^毛つ^毛らん 雅綱
- 16 里^毛人^毛ハ^毛そ^毛む^毛く^毛とな^毛し^毛に^毛ぬ^毛ね^毛よ^毛は^毛も ^毛月^毛を^毛煙^毛に^毛やつ^毛す^毛蚊^毛遣^毛火 季種

十一日 閑庭瞿麦 夏の12 32

1	何かおもふ今は ^盤 のちりをたに ^多 へらは ^者 やとの床なつのはな ^{者奈}	実隆
2	あるしとてわれやハおらむこゝろなく ^{無古} あらしはてたる庭のなてしこ ^{者多奈}	永宣
3	あさちふの奥にもさけるこゝろこそ ^{乃尔佐古} わか床なつの色にしるけれ ^{可奈}	政為
4	露 ^{乃奈} の庭なさをかくる人しあらハ ^{越可類} わかおもふかひや床夏のはな ^{者那}	和長
5	すむ人も見えぬあさちか庭の面は ^可 いかて塵なき床夏のはな ^{奈起}	康親
6	荒のこる宿はむかしの床夏の ^盤 花やへらはぬ塵にむもれん ^{者尔毛}	重治
7	つくく ^徒 と見れともあかす庭の面に ^可 おきふしなるゝとこなつの花 ^{奈類}	雅綱
8	ひとりのミ見るにはおしくさきにけり ^{尔盤} むくらの宿の庭のなてしこ ^{尔个利}	伊長
9	人とハてあれたる庭のまかきには ^多 塵の底なる床なつのはな ^{乃満可起尔盤}	元長
10	おしむへきあはれ ^者 もしらぬ庭の面や ^志 ひとりのためのとこなつの花 ^{能奈}	公條
11	花もその床なつかしき古郷の ^{毛奈} 色にやそ ^尔 の露をうくらん ^起	為孝
12	たのミける契もかなし山かつの ^{堂希} かきほをかけ ^{可起本} とさけるなてしこ ^奈	済継
13	待人もあらハそ庭のちりをたに ^毛 へらはてをミン床なつの花 ^{李越多尔}	公音
14	ささいつる花もまかハぬ色ながら ^起 宿はむくらの庭のなてしこ ^{毛満可}	季種
15	花の色も葎にとつる宿よりや ^{乃尔} なをなてしこのあわれそふらん ^{奈越奈}	守光
16	はらハねと塵にけかる ^{栋登尔希可累} 床なつの ^奈 花の色のミおしき宿かな ^{可奈}	

※日…(れぬイ)。日・伏・阿…れぬ。高…る、

十二日 沙月忘月 夏の13 33

1	影さえて真砂に霜を置ながら ^尔 焔をわするゝ月のみしか夜 ^{奈可}	永宣
2	月や秋真砂や霜にわかかねつ ^尔 夏はいつくのくまとなるらん ^{起可年}	雅綱
3	明やすき空に ^尔 夏を思ひいて ^可 ん ^乃 真砂の霜のふかき夜の月 ^{可起}	政為
4	夏のよの月とはいはし真砂路に ^{乃能} 婦 ^可 ふむ跡きえぬ雪をみるかな ^{越奈}	元長
5	鳴るる真砂の月のかけすみて ^{類乃} 夏なき ^{奈起} 水 ^乃 のよるそ涼しき ^累	公條
6	月にゆくいさこの麓すゝしきハ ^尔 霜夜の鐘に山かせそふく ^可	実隆
7	涼しさもぬれて真砂の月影や ^毛 庭に夏なき ^{尔奈} ゆふ ^多 た ^阿 ちのあと ^可	季種
8	忘れては霜や置らんゆふ浪の ^{連盤} 真砂の月のかけのすゝしさ ^{能可}	公音
9	焔の月霜をく庭とみしかけや ^乃 あけて涼しき露の真砂地 ^{可希}	済継
10	露しめる真砂 ^{志類} の月のすゝしさを ^{乃能} 焔の色く ^尔 の有数にせん ^{尔世}	守光
11	霜の色を月に見せたる真砂ちに ^{乃尔} かねもさやけきみしかよのそら ^{可格}	康親
12	霜とみる真砂の月のかけよりそ ^{能可} 明やすき夜 ^{母梨} もミにわすれぬる ^王	重治
13	夏ころもうすき袂に真砂路の ^{古毛} 霜よの月の秋さゆるかけ ^{累可希}	重治
14	夏しらぬあたりの清水猶さえて ^志 月も氷をしく真砂かな ^{毛志}	為孝
15	月影の真砂ミたるゝ夏草に ^{多累} によるく ^{尔累} や焔のはつしも ^毛	和長
16	あつさをもかつ忘れけりをく霜の ^毛 さよき真砂や夏のよの月 ^{可利}	伊長

※日…沙。伏…まきこ。高…真砂

※日…伏。白雨。高…ゆふたち

※阿…も。※2阿…け

雪…波

十三日 野亭螢火 夏の14 34

1	螢とふ飛火の野守いて、見よ	いまいくよハのタやミのそら	永宣
2	行はたるをとりかしつる影もうし	秋風ちかき野へのかりいほ	政為
3	隣なきいはりにちかくともす火は	野沢にもゆる螢なりけり	元長
4	春日野、野守か庵もかくれなき	夜のほたるやとふ火なるらん	雅綱
5	風さかく野守かいはにとす火と	ミゆるやきえぬほたるなるらん	伊長
6	草のはらく火のとほそよる虫に	をのれとりえて螢とふかけ	和長
7	月くらき野中の松のかけの庵	光もありと行はたるかな	公條
8	草かくれ見えし螢もかけ消て	あくる夜くらき野への庵かな	実隆
9	あらハなる野へのかり庵にとす火の	影をのこして行螢かな	済継
10	いたつらに行はたるかなあつめをく	人は夏の、草のいほりに	康親
11	身をしろもハかなき野への草の庵は	とふや螢も石の火のかけ	守光
12	心なき野原の庵にすむ人の	あつめかほにも行はたるかな	公音
13	あつめける窓にはあらて住人も	夏の庵に螢とふみゆ	季種
14	くらき夜の光をミせていほむすふ	野沢の螢いつちゆくらん	重治
15	くみなれし野守か庵のむもれ水	ありとやこ、に螢とふかけ	為孝
16	たれかととびくる野への草の庵	見えしハよるのほたるハかりを	

十四日 晩夏蟬声 夏の15 35

1	なく蟬のそめぬ梢も焔ちかき	こゑにしくる、もりの下つゆ	永宣
2	涼しさはや焔風のこすゑより	夏をわすれぬ蟬のまろ声	雅綱
3	鳴こゑはなにの名残かうつせみの	はやまにくる、ミな月のそら	政為
4	かハリゆくうつせみのよの夏もはや	とまとるハなき露の本	和長
5	なく蟬のこゑのしくれば夏はつる	梢に焔を先いそくらん	元長
6	きけは又たもと涼しくなく蟬の	なミたに焔の露やちるらん	公條
7	猶そなく人の焔にはあはしとも	ミをうつせみのおもひやハせぬ	実隆
8	秋風のこすゑを待やうつせみの	つきぬねになく夏はくれけり	為孝
9	焔風にうつりかハらむなつ山の	梢やしたふうつせみのこゑ	重治
10	程なさをおもひやむせふ空蟬の	はにをく露にかよふ秋かせ	済継
11	色にいて秋もやちかきなつ山の	木すゑしくる、蟬のまろ声	公音
12	枝の露になくとはしるし秋ちかき	は山のせみの声しきるにも	康親
13	なく蟬こゑもしくれて秋ちかき	ミそやいそくもりの下かけ	季種
14	みそきする杜の下ミちくる、より	秋かせつくるせみのまろこゑ	守光
15	夏こももうすきにおもふ秋かせを	いそくもくるし蟬の諸声	
16	をく露の杜のしめ縄くる、日に	秋風さそふせみのまろこゑ	伊長